掲載記事の無断転載転写を禁じます

平成25年3月31日発行

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と
海光るわが故里

第 106 号

長谷川路可と父・欽一 …… 長谷川　祐… 1
鵠沼近辺でみられるチョウ …… 竹内　広弥… 6
エッセイ「くげぬま断章」(Ⅵ) 岸田劉生と相撲 …… 山上　英男…10
「汐止の碑」の謎 …… 有田　裕一…18
研究論文
　鵠沼海岸でのサーフィン発祥前史 …… 小林　勝法…27
Coffee break「鎌倉での芥川龍之介」…… 小池　清志…40
六代目尾上菊五郎の思い出 …… 松本　絹代…42
事業報告
　公民館祭り展示「芥川龍之介と鵠沼とのかかわり」……45
　今井達夫「馬込文学村二十年」冊子化 ……52
　藤沢の巨樹めぐり ……54
今井達夫遺稿「散歩の出来る街」…… 今井　達夫…65
活動の記録（平成24年9月～25年3月）…… 総務担当…67
編集後記 ……70

『新編相模国風土記稿』（天保12年、1841)に、「鵠沼村久久比奴末牟良」
とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

長谷川路可と父・欽一

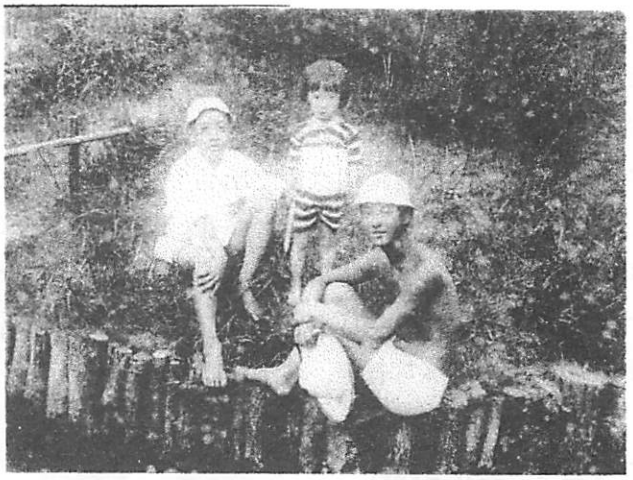
長谷川　祐（会員）

兄弟以上の仲よし従兄弟

長谷川路可画伯（1897～1967）と東屋旅館最後の経営者だった父欽一（1900～1985）とは従兄弟の間柄で、年は路可の方が３歳年上でした。普通の従兄弟とは違い、幼いころからほぼ一緒に生活を共にし、暁星中学時代には東京雑司ケ谷に一軒を借り、ともに通学し兄弟同様に暮らしていました。

二人の性格は全く違い、路可は明るく快活であったのに反し、父は寡黙で余計なことはしゃべらない方で、どこでウマが合ったか、路可が昭和 42 年ローマで客死するまで兄弟のような付き合いが続きました。

富士登山？欽一(左) 路可(右)



東屋の池で　欽一(左) 路可(右)

路可の母たかと東屋の初代女将の栄（えい）は金沢藩士長谷川信守の娘で、信守には一男五女の子供があり、たかは次女、えいは三女でしたが長女が夭折したため実質的にはたかが長姉であったようです。

たかは杉村清吉と結婚し、路可（本名：龍三）を産みましたが、路可が小学生のころ離婚し、妹栄の経営する鵠沼「東屋」に路可とともに一緒に住み、妹を補佐していました。　一方、欽一の父親繁造は長谷川家の唯一の男性でしたが欽一が生まれてすぐに亡くなり、欽一は鵠沼の叔母栄に引き取られ、これまた長谷川家唯一の男性として何不自由なく大事に育てられました。が、欽一 16 歳の大正　5

年栄が亡くなり、姉のたかは東屋の経営を引き継ぎ万事を仕切るとともに、長谷川家嫡男である甥の欽一と、わが子龍三の二人の養育に当たることになります。

路可は大変ないたずら坊主で龍三が来たら物を片付けろと言われたほどで、坊ちゃま育ちの欽一とは対照的な存在のようでした。

路可は暁星中学生の 15 歳で黒田清輝の研究所に通い、16 歳で洗礼を受け洗礼名ルカを授けられました。17 歳で渡辺華石に南画を習い第２回院展に入選。18 歳で東京美術学校（今の東京芸術大学）日本画科へ入学し、松岡映丘に師事。大正９年東京美術学校を卒業。翌 10 年５月、加茂丸に乗って渡仏します。

欽一も暁星中学から東京外語学校（今の東京外語大学）フランス語科へ入学し音楽評論家を目指して大正 11 年春、伏見丸に乗船、路可を追ってフランスに行きパリで二人の生活が始まります。翌年には二人でブルターニュの寒村に滞在しました。しかし、不幸なことに大正 12 年９月１日関東大震災が発生し、東屋は全壊したため長谷川家唯一の相続者であった欽一は急遽、鵠沼に呼び戻されて、東屋再建を叔母たかから任される破目となり、ここで音楽評論家の夢は断たれてしまいました。

路可は引き続き滞仏して油彩画を学びサロン・ドートンヌ、アンデパンダン、サロン・ナショナル等に相次いで出品。一方、フレスコ画法、西洋服装史を学びました。また、結城素明の指示でパリ、ロンドン、ベルリンの博物館所蔵の西域壁画の模写を行い、この業績が評価されてサロン・ドートンヌ会員に推挙されました。昭和２年３月 16 日、香取丸で帰国。欽一が鵠沼に建てておいてくれた西洋風のアトリエに落ち着き、翌年結婚しました。

変わる運命・変わらぬ絆

話は少し戻りますが、路可の母たかは気性が強く士族の娘として武家の気風を身に付けた人で、東屋をそっくり欽一に譲ったあとは昭和 13 年に亡くなるまで東屋の経営に一切注文を付けなかった、つまり、物事のけじめをきっちりつける人でした。そのひとつに息子の路可が渡仏するときは３等船室、長谷川家の嫡男である欽一のときは１等船室にさせるなど区別のはっきりした人で路可もその点似通った所がありました。

父、欽一は性格は大人しいほうでしたが、文学青年であり、東屋に来泊した新劇の小山内薫、青山杉作、千田是也、岸輝子、村瀬幸子らの知己を得、俳優にならないかと誘いを受けたこともあるといいます。また、運動神経抜群で、学生時

代から野球、サッカー、陸上で活躍し、外語時代に陸上でインターハイを取ったと自慢していました。東屋の庭内にテニスコートを２面作り没頭していましたが、30歳頃からゴルフに転向し、シングルプレイヤーになりました。藤沢カンツリー、相模カンツリーでは、石川達三、久米正雄、獅子文六、大佛次郎などの文人とプレーを楽しみました。音楽評論家の夢が挫折した鬱憤をスポーツに向けただけでなく、ビリヤード、麻雀、社交ダンスも名人で、戦後自宅に若い方々を集めてダンス教室をしたりしましたが、私はレコード係でした。

路可はいわゆるお調子者的なところがあり、戦後よく食事をご一緒しましたが、彼は食べる前から「おいしい、おいしい」を連発し、母から「路可さんはまだ食べてないじゃないですか」とからかわれても平然としている楽しい一面もありました。

父と路可はよく内緒話をフランス語で話し合うので、何がなんだかさっぱり分からないと母が恨めしげに笑っていたのも二人の親密な間柄を表すエピソードと言えるでしょう。

話し上手で聞き上手、明るく楽しい呑兵衛の路可。スポーツマンでダンディ、でもお酒は全く駄目な欽一、全く対照的な二人でしたが本当に仲がよかった。

いつも年下の欽一を「欽ちゃん、欽ちゃん」と呼んで立てて下さり、たかさんの気風を受け継いでおられたと思います。父が路可を兄とも慕ったことは、アトリエを建ててひたすら帰国を待っていたことでも分かります。

最後に、大佛次郎さんの路可についての一文を転載します。路可の天衣無縫な一面が、じつにユーモラスに描写されています。

（はせがわ　ゆたか）

路可伝

大佛 次郎

「路可伝」と題して、聖書にあるキリストの伝記ではない。日本人としてイタリアのチビタ・ベッキァの寺に八年がかりで壁画を描いて、この都市の名誉市民に推された画家長谷川路可のことである。路可は、その壁画の仕事でことしの菊池寛賞を受けることになった。

戦前に鵠沼海岸がまだ今日ほど開けないで静かだったころ、「東屋」という旅館があって、大正時代には芥川龍之介、久米正雄、武林無想庵などが仕事にたてこ

もった家として知られている。菊池寛も泊まったことに違いない。太平洋戦争中、「東屋」の当主でそのころゴルフの名手だった長谷川欽一が営業をやめ借家に分割してから名物だった姿を消してしまった。長谷川路可は、その「東屋」の一族で、私が近付きとなった昭和のはじめには「東屋」の隣の地内に木造洋館のアトリエを持って画を描いていた。

路可はクリスチャンネームで、現在の路可は還暦を過ぎた年齢だが、子供の時からカトリックに帰依していた。

美術学校で洋画を勉強したのだが、途中から松岡映丘氏につき日本画を描き、たしか長崎の遊女が切支丹改めの踏み絵をしている艶麗な絵を描いて在学中に帝展に入選し、天才児だと書きたてられたものである。信者なのでカトリックの暁星中学を卒業後も寄宿に置いてもらって、美術学校に通っていた。彼の部屋は屋根裏だったそうで、そこへモデルを連れ込んで裸にして制作していたところへフランス人の坊さんが偶然ドアを開けて入って来た。女人禁制の学校の屋根裏で裸の女を見たので、坊さんは驚いて飛び出して逃げ、路可は寄宿から追われた。路可らしい話なのである。

カトリックでは酒は許すので、路可の酔態は実に快活で、かわいいところがあった。大震災の時分、フランスで勉強して来たが、話題がゆたかで、ダンス上手。

堅固なカトリック信者が、深く酔うと、からだがぐにゃぐにゃになって、上着からズボン、下着まで、すっぽり抜ける。手品のように不思議であった。そこで路可さんと飲むと、潮時を見て逃げ出さないと、重いやつをおぶって帰ることになる。

私が東京の帝国ホテルに泊まっていて路可さんと出会い、銀座で大いにやって、そろそろ危ないと見たから同じ画家の友人に頼んで逃げて他の店をまわり深夜にホテルの部屋のドアを押したら、何かつかえて開かない。よく見たら、路可さんが床のジュウタンに大の字になって前後不覚に寝込んでいる。最後まで付いていた友だちが手を焼いて私の部屋に放り込んで逃げたのに違いない。あくる朝が展覧会の開会日だとかで路可さんはモーニングを着て鵠沼から上京して来ていた。見れば床のジュウタンも路可さんのモーニングも酒臭いゲロに浸かっている。

私は彼をまずモーニングと、はいたままの靴から解放した。この洋行帰りのカトリック信者が、下では古風な日本の下帯の愛用者であることも、その時発見した。無意識でぐったりとした彼を寝台に運んだのはよいが、さてモーニングの始末が大変である。明日は展覧会に、かしこき方が見えるとかの礼服だし、これか

ら鵠沼の家に帰っても、もう一着あるわけのものでない。ホテルだから夜中でも浴槽に湯が出た。冬のことでヒーターも通っている。洗ってヒーターに干せば朝までに乾くだろうと思った。私も半分ヤケで、この野郎めと思って、路可さんのモーニングを風呂場で湯の中に突っ込み、まる洗いの作業を始めた。シャツくらい自分で洗濯したことがあるが、モーニングのまる洗いは、ちょっとした大事業で、濡れるとずいぶん重いものだと私は知った。

夜があけると、路可さんはけろりとした顔で目を覚ました。「ああ、こんなところに来ていましたか」といい、よれよれにしわだらけになって乾いたモーニングを着込んで、ホテルの玄関から平気で出て行った。

その路可さんが信仰とまた画のために、イタリアの田舎町に八年の長い歳月を立てこもった。修道院に付属した寺のことで、来る日も来る日もまずいマカロニばかり坊さんと一緒に喰いながら、長崎の二十六聖人処刑の大壁画を完成したのであった。私もその画を見にベッキアの町に立ち寄ったが、同行した佐藤敬さんの話しだと、路可はチビタ・ベッキァがどんなところか知らず汽車を降りて見たら、何もない、つまらない田舎町だったので、歩いて寺の門まで行くと、がっかりして石段に腰を下ろしたまま、しばらく立ち上がる気力もなくしていたそうである。ジオットだの、アンジェリコ、フランチェスカ、ミケランジェロなど、古くから壁画では世界的な巨匠が出た国へ、日本から出かけて行って、日本画の技法による画を描いて、現在では寺はチビタ・ベッキァの名所となり、美しい色刷りの絵葉書まで売り出されている。そのことよりも私は路可さんの辛抱強さに驚くのである。八ヵ年マカロニばかり食って、こんな大きな画を描き上げたとは五十歳を出てからの八年の歳月なのだから感心する。

きょうは、これから私も菊池寛賞の授賞式に立ち合いに出かけるが、堅い男だからモーニングを着て出て来るに違いない。多分、私は笑い出すだろう。どうやら路可は、昔、私がまる洗いしてやったモーニングに新しくアイロンを当てて、折り目正しい姿で出現しそうな気がする。

〈S35(1960)年３月８日付 神奈川新聞「ちいさい隅」欄〉

〈長谷川路可展　S47/９/26～10/22 南蛮文化館 カタログ〉

編集注：原文「あずま家」を「東屋」に訂正した。また「八年がかりで壁画を描く」とあるが、実質は４年（1951/７～1954/10）である。但し前後を含め約７年間のイタリー滞在（1950/12～1957/8）であった。

鵠沼近辺でみられるチョウ

竹内 広弥(会員)

2012年6月15日～9月15日、鵠沼郷土資料展示室で「鵠沼の自然」展が開催されました。この展示は鵠沼郷土資料展示室運営委員会が、鵠沼の自然に興味を持つ団体、個人に出展を呼びかけたもので鵠沼を語る会の副会長でもあった渡部瞭さんが中心になって企画したものです。当会では過去に公民館まつりで鵠沼の自然をテーマに展示したこともあり、今回は『鵠沼近辺でみられるチョウ』をテーマに出展しました。

≪みられる蝶は約40種≫

松の緑にあふれた鵠沼も、1960年代に入ると急速に土地開発が進みました。

鵠沼新道が開通し周りにあった田んぼは、すっかり宅地となり昔の面影はありません。春になると今の八部公園から鵠沼伏見稲荷辺りにかけて、レンゲの花で一面ピンクに染まり、いろいろな生き物が姿をみせていました。まさに子どもたちの格好の遊び場でした。

宅地化で蝶の食草(しょくそう)が減り、みられなくなった蝶もいますが、逆に暖冬化や放蝶が一因で鵠沼近辺に新たに棲みついた5種類の蝶 ― ツマグロヒョウモン、ナガサキアゲハ、ムラサキツバメ、クロコノマチョウ、アカボシゴマダラ ― がいます。現在、40種類ぐらいの蝶が、鵠沼近辺(長久保公園、新林公園、江ノ島を含む)でみられます。今回の展示では、鵠沼近辺で以前からみられる蝶と近年みられるようになった蝶とをあわせ、以下の標本を展示しました。

<アゲハチョウ科> アオスジアゲハ　モンキアゲハ　ナガサキアゲハ　ジャコウアゲハ　カラスアゲハ　クロアゲハ　アゲハチョウ　キアゲハ

<タテハチョウ科> ルリタテハ　アカタテハ　ヒメアカタテハ　キタテハ　ゴマダラチョウ　コミスジ　イチモンジチョウ　ツマグロヒョウモン　アカボシゴマダラ(外来種)

<テングチョウ科> テングチョウ　**<マダラチョウ科>** アサギマダラ

<シロチョウ科> モンシロチョウ　スジグロシロチョウ　キチョウ　ツマグロキチョウ(現在はいない)　**<シジミチョウ科>** ムラサキシジミ　ムラサキツバメ　ウラギンシジミ　ルリシジミ　ヤマトシジミ　ツバメシジミ　ベニシジミ　ウラナミシジミ　オオミドリシジミ　アカシジミ　トラフシジミ　クロマダラソテツシジミ(一時発生の蝶)

<ジャノメチョウ科> コジャノメ　ヒメウラナミジャノメ　キマダラヒカゲ　クロコノマチョウ　ヒカゲチョウ　**<セセリチョウ科>** ダイミョウセセリ　イチモンジセセリ　キマダラセセリ

10 数年前から棲みついた蝶

ツマグロヒョウモン

ナガサキアゲハ

ムラサキツバメ

クロコノマチョウ

アカボシゴマダラ

≪蝶は緑いっぱいが好き≫

ここ10数年で、まったくいなくなった蝶、みかけることが少なくなった蝶、あたらしく棲みついた蝶など、時代の流れにともないみられる蝶の種類も変わってきています。鵠沼近辺から全く姿を消した蝶の代表格は、ツマグロキチョウ。この蝶は、いつ頃からいなくなったのでしょう。

藤沢市内でも東海道線より北側の野原や畑・田んぼ、長久保公園、新林公園などにゆけば、モンキチョウ、ツマキチョウ、ミズイロオナガシジミ、トラフシジミ、オオミドリシジミなど、みられる蝶の種類が増えます。江ノ島の草地には、アサギマダラがゆるやかに飛んでいます。すっかり住宅地になった鵠沼でみられる蝶は昔ほど多くはありませんが、ちょっと足を延ばして緑の多いところにゆけば、まだまだたくさんの種類の蝶にお目にかかれます。蝶の食草が十分復活すれば、今は少なくなった蝶も戻ってくるでしょう。

≪10数年前から鵠沼近辺に棲みついた蝶≫

■ツマグロヒョウモン　前翅(ぜんし)の先端に鮮やかな黒色に白帯が入ったツマグロヒョウモンのメスは、とてもきれいな紋様をした蝶です。鵠沼でこの蝶を初めてみたのは10年以上前。その後、急速に増え今では普通にみられます。「ツマ(端)の黒い豹紋蝶」はメスの翅紋(しもん)によるネーミングで、オスの前翅には顕著な帯はありません。もともと西日本に生息していた蝶で、暖冬化の影響でしょうか、年々北上し関東一円にまで勢力を広げてきました。

9月、庭のスミレやパンジーの葉が食い荒らされているのに気づき良くみると、そこには黒地にオレンジのストライプが入った毒々しい毛虫がいました。これはツマグロヒョウモンの幼虫で、食欲は旺盛でスミレの葉をたちまち食べつくしてしまいます。パンジーなど園芸植物を食草とするツマグロヒョウモンは市街地に多くみられ、鵠沼は格好の住処となったようです。この蝶は食草に直接、産卵する場合と食草近くの枯れにくいものに産卵するふたつのケースがあるようです。後者の場合、孵化した幼虫は、まず食草探しから始めることになります。

■ナガサキアゲハ　10年ほど前の秋、庭に大きなアゲハチョウが飛来。吸蜜しながら、ゆったりと翅(はね)を動かしています。前翅のオレンジの紋、後翅の線状白紋が実に鮮やか、尾状突起(びじょうとっき)がありません。まさしくナガサキアゲハのメスです。何しろ大きい蝶です。後翅に突起がないのがナガサキアゲハの特徴。クロアゲハより一段と黒光りのする蝶をみかけたら、ナ

ガサキアゲハのオスです。日本で初めてこの蝶を発見したのは、かの有名なシーボルト博士。発見場所の「長崎」にちなんで命名されました。

暖冬化が進んだとはいえ、50年以上前に蝶採集を始めたときには、鵠沼でナガサキアゲハをみることができることなど思いもよりませんでした。食草は柑橘類でアゲハ、クロアゲハと似た幼虫となります。

■ムラサキツバメ　この蝶も暖冬化の影響でしょうか、鵠沼辺りでもみかけるようになりました。鵠沼公民館の敷地にはマテバシイがありますが、秋になるとムラサツバメがこの木の周りを飛び交います。マテバシイは、この蝶の食草なのです。ムラサキツバメの生息地が北に延びているのは暖冬化と関係があるといわれていますが、マテバシイが近年、街路樹や庭木として盛んに植樹されていることも一因、と思われます。この蝶は集団で冬を越しますが、藤沢の石川辺りの谷戸で、その光景がみられることが報告されています。

■クロコノマチョウ　1960年代には静岡辺りが、この蝶の生息北限でしたが暖冬の影響でしょうか、鵠沼辺りにも棲みつくようになりました。食草はジュズダマ、ススキなどです。秋口に多くみかけますが、夏型と秋型では紋様が異なります。薄暮時に活発に飛び回りますが枯葉の多いところに止まると、保護色で分からなくなります。茶一色の模様とバタバタした飛び方が蛾を思わせ、見慣れない人にとっては蝶とは思えないかもしれません。鵠沼の家の壁に止まっていたこともありますが新林公園など生息環境が整ったところでみかける蝶です。

■アカボシゴマダラ　アカボシゴマダラは、暖冬化が要因で鵠沼辺りでもみられるようになった蝶ではありません。これは外来種の蝶です。もともとは中国本土に生息するもので、誰かが放蝶したのではないか、といわれています。

藤沢市内で初めて発見されたのは長久保公園で、1998年のこと。その後、新林公園でも飛び交い、アカボシゴマダラの生息地としてチョウ・マニアの間で一躍有名になりました。生息地はどんどん広がり、北は埼玉県あたりまで延びています。夏型は後翅の赤紋が鮮やか、春型は全体に白っぽく赤紋が薄く、季節によって別の蝶のようにみえます。4月頃、ツツジの植え込みなどに混じって生えている小さなエノキを探すと、アカボシゴマダラの幼虫をみることができます。在来種のゴマダラチョウと食草が同じエノキで、アカボシゴマダラの勢いにゴマダラチョウが押され生息が脅かされるのではないか、と心配されていますが長久保公園で観察している限りでは、その影響はなさそうです。

（『鵠沼の自然』出展担当　　たけうち ひろや）

くげぬま断章（VI）

岸田劉生と相撲

山上 英男（会員）

1月8日（木）晴

・・・仕事中玄関に万歳（まんざい）来りうたう。麗子あわてて二階より走り下り喜んで見る。こわいものだとたわむれても、面白さに見るを止めず。鵠沼に住みてかかるもの子供にとりて珍しきは当たりまえならんと思う。あとにて麗子万歳が鼻の穴を大きくしたり少（ちい）さくしたりしたといいて皆を笑わす。

（岸田劉生『鵠沼日記』）

◆

〈麗子微笑〉や〈麗子立像〉などの油彩画によって、よく知られている大正期の画家・岸田劉生（りゅうせい）は、大正9（1920）年のはじめから日記を書き出している。30歳であった。

「新しい心地幾らかする」と記した。

「皆めでたく、年を取り、トソ雑煮を祝」い、餅を12個も食って、自身で驚いている。夜にはさっそく麗子（7歳）の坐像をスケッチした。

上に抜書きした日記は、この年の正月8日のものである。

93年も前の、鵠沼の新年風景だ。

昭和のはじめごろには、もうすでにこうした門付け万歳は見かけなくなっていたそうである。それでも新年を寿（ことほ）ぐ門付け芸は、まだ獅子舞などに残っていて、戦時中の幼年期、正月を鵠沼の祖父母の家で過ごした私は、獅子に頭を噛まれて、大騒ぎしたものだった。

戦時中でも庶民は正月の行事をどうにか守っていたようだ。・・・行事の維持のため青年団とか消防団の人が獅子頭をかぶっていたような気もするが、確かなことは分からない。

いずれにしても、麗子が喜んだ万歳や小さな子供が怖がった獅子舞のような民

間芸能は、生活様式が激変した昭和30年代にはすっかり消えてしまった。

◆

新年になって、海岸を歩いた。

日射しはまぶしかったが、さすがに風は冷たい。それでも相変わらず多くのサーファーが出ている。この季節に人が海に浮いているのを変に思わなくなって久しい。これが今の鵠沼風景だ。

ただ、きょうは凧やカイトが揚がっている。こんなところは、やはり正月気分、昔と変わらない。父と子が一緒になって熱中しているのがいい。

サーフビレッジのあたりから江ノ島水族館のほうへ歩いて行くと、中学生ぐらいの少年たちが、ボール遊びに興じていた。

今はたいていサッカーかビーチバレーだ。グローブをはめてキャッチボールする風景もあまり見なくなった。

まして相撲をとる子など今はどこにもいない。

男の子たちが砂浜へ連れ立って出れば、季節を問わずたいてい相撲をとって遊んだ時代があった。長谷川町子のマンガ『サザエさん』でも、カツオたち戦後の男の子は盛んに相撲で遊んでいる。

これも昭和30年代にはすたれた。

しかし戦前には、子どもの遊びというよりは、むしろ成年男子の娯楽として大変な人気だった。「昭和10年ぐらいまでは、どこでも素人相撲が盛んで、この鵠沼でも町内、村々で若い衆が競い合ったりしたもんだ」と、祖父から聞いたことがある。

寺社の縁日の折などに行われたのだろうか。

◆

劉生も相撲が好きだった。庭に土俵までつくっている。

日記には小さなスケッチが添えられているが、それをみると力士のようにマワシをつけて裸で組み合っている。なかなか本格的なのだ。

来客があると、たいていその客を相手に相撲をとった。

作家の志賀直哉や長与善郎も土俵にあがっている。イギリスへ帰国するまえに

訪ねてきた陶芸家のバーナード・リーチまで土俵にあげている。

「鵠沼停留所までリーチを迎えに行ったら、丁度来合わせた電車に乗ってきた。いろいろ話が尽きず。夕方（画家の椿貞雄も加わり）三人で角力をとる。リーチはなかなか強かった」という具合である。

大正９年８月の劉生日記にも「３時半頃から海水浴に行く・・・明後日は片瀬に午後からマワシ開きとかがあるとか・・・帰って横掘と角力とる。入浴後片瀬に角力見に行く」とある。誰もが身近に相撲を楽しんだ時代なのだろう。

「浜で椿と角力とる。丁度地引網の上る時で蓁（しげる＝劉生夫人）たちは魚を買おうと待っている。今日は大漁にて沢山の魚がとれていた」（大正９年７月９日）というような日もある。

劉生はいつ頃から、こんなに相撲をとるようになったのだろうか。

美術雑誌「アトリエ」（昭和５年・２月号）の岸田劉生追悼記念号に「葵橋研究所時代の岸田君」（桜井知足）という文章があるのを、会員の岡田哲明さんから教えられた。

そこに次のようなエピソードが紹介されている。引用してみよう。

・・・丁度その頃、研究所では大変角力が流行り、中々強い人も四五人は居た。立派に学生角力に参加出来るだけの体格と力量を具へて居た人も居た位で、そうした連中が中心に毎日モデルの休み時間を利用しては、研究所の中庭で大供連が、泥まみれになつたものだ。

岸田君は中でも、最も熱心な力士の一人で、モデルとにらめつくらをするより余程この方に興味を持つたらしく、絵具箱は持つて来ても、そんなものには御用なしに、皆が帰る時間迄、角力ばかり取つて居たことも度々あつた位だ。

ある時などは着物の袖が殆ど離れそうになるまでほころびたのを、そのままぶらぶらさせて、二日程やつて来たので、どうして直さないんだと尋ねると、君の曰く、何度縫はせても直ぐ綻びるので、毎日の様に縫はされる女中のやつ、ぶうぶう言ふから、取れるまで辛棒してるんだ、と云つて平氣でぶらぶらさせて居た。

仕舞ひには鍋島の原まで出かけて行つて盛んにやつたものだ。それほど岸

田君はものに熱中する人であつたことが実証される・・・

この研究所というのは、東京赤坂溜池にあった白馬会葵橋洋画研究所のことで、黒田清輝などが指導にあたった白馬会の付属機関である。東京美術学校卒業生や一般洋画専攻者の研究機関で、明治31年に創設された。

この研究所で劉生は、どうも相撲も熱心に学んでいたようだ。

◆

さて、こんなにも相撲が好きな劉生であったが、国技館で本場所を見たのは翌大正10年5月場所が初めてだった。

さすがに、この日の日記は熱がこもっている。

「本場所は・・・本当に力が入って面白かった。角力には子供の時、学校の友だちがよく行くので、行きたくて母にせがんで一度は行きそうにまでなったのに、とうとう行く事が出来ず、随分行ってみたくて行ってみたくてならなかったものだが、いつも行けずにくやしかったものだ」と記した。

きょうその念願が叶った。劉生の気持ちの昂ぶり、察せられるというものだ。

ところで、この国技館は前年（大正9年）再建されたばかりの建物だった。

明治42年以降ずっと両国回向院境内にあって、ドーム屋根の洋風建築として、その外観を誇ってきたのだが、大正6年、失火で全焼してしまったのだ。

この再建された建物について、劉生は何もふれていないが、まだ真新しい館内の雰囲気をも楽しんだに違いない。

しかし、これも大正12年の関東大震災で倒壊、わずか3年の命だった。

劉生は、その僅かな歴史しか持てなかった国技館を体験したひとりになったわけである。

国技館といえば、その館名は作家の江見水蔭（えみすいいん）の書いた一文から採ったものだという。これは半藤一利の『大相撲こてんごてん』（ベースボールマガジン社）で知った。

少し長くなるが、これも面白いので、その一部を引用させてもらう。

・・・明治のころは回向院の大相撲といわれて、晴天十日の興行、テント張

りであった。勧進元は風雨があった場合などを考え、前後十五、六日の予算を組んだという。そこで知恵者がいて、常設館を建設してしまおうということになったのが、明治三十九年（1906)。この年の三月の議会に「大相撲常設館建設の国庫補助案」が上程されている。

「国民の体躯精神をして勇武剛健ならしむるの特技たる角力の如きは、よろしく国民的遊戯として之を保護奨励すべきの要務たるを信ず」

というわけで、国庫補助もおり五月からトンテンテンカンと工事がはじまって、満三年の歳月と、二十七万円を費して、明治四十二年になり、もうすっかり建物ができあがりかけた。が、名前がまだない。議論百出したが決定しなかった。自由党総裁板垣退助が委員長となって、命名委員会まで結成されたが、議まとまらず、「武道館」をよしとするもの、「相撲館」を可とするものなど喧々囂々（けんけんごうごう)。

そのとき年寄のひとり尾車文五郎が、すでに文人江見水蔭に頼んで書いてもらってあった『開館披露文』を眺めていて、その中の一節に目をとめた。

「事新しく申上ぐるは如何なれど、そもそも角力は日本の国技、歴代の朝廷これを奨励せられ、相撲節会の盛事は尚武の気を養い来り、年々この儀行われて、力士の面目、ために一段の栄を加え・・・」

尾車親方がおずおずとだした「国技館」案に、板垣委員長がすぐとびついた。「ウム、できた！　それでいこう」

五月三十一日、ここに新しい建物は国技館と命名、華々しく誕生した。

開館式の六月二日、新聞が皮肉っているのがおかしい。「国技という新熟語も妙だが、角力ばかりが国技でもあるまいとの冷評が、一般に喧伝されている」

なるほど柔道、剣道、弓道など他の武道にも日本古来からのものもある。異論が出るのも当然。が、それらをさしおいて、相撲こそ国技なりと打ちあげた先見の明は見事。

大手柄の江見水蔭に、いい句がある。

日の本を踏み固むるは相撲かな

以上、国技館命名にいたるエピソードだが、この江見水蔭のことで竹内広弥さんが『鵠沼』104 号に「江見水蔭・片瀬の居住箇所はどこ？」という探訪記を書いている。ついでながら付け加えておく。

国技館のことにふれているうち、それにまつわることがいろいろ思い出されてきた。少しばかり劉生から話がそれるが許していただきたい。

1950年代初頭に中学生だった私などは、蔵前の国技館が懐かしい。

第44代横綱栃錦と45代横綱若乃花の熱戦が、蔵前国技館からラジオ中継される、その実況放送に文字通り手に汗を握ったものだった。

ところが高校、大学のころにはすっかり関心が薄れ、そのまま仕事について60年代を過ごした。それでも柏鵬時代の大鵬の評判は記憶に残っている。

熱心に勝負を見聞きすることはなかったが、この高度成長期の時代が生んだ蔵前のスターの動向はしぜんに伝わってきた。まさに「巨人、大鵬、たまご焼き」で、大鵬による相撲人気は際立っていたのだ。

80年代初めには、こどもの嫌いなものとして「江川、ピーマン、北の湖」と評されたころの北の湖の強さも、どういうわけか記憶している。

さらに、1985年には友人のNが「知人から相撲に招待された。一緒に行かないか」といって、私ともう一人の友人とを誘ってくれ、新装なった今の両国の国技館の1月場所を体験したことがある。この時は第58代横綱千代の富士が全勝優勝を果たした年として、あわせて記憶される初場所であった。

また若貴時代もあった。

その時代を語る歌があるように、その時代を語る横綱もあるようだ。

相撲にそう熱心でなかった私にしてからが、このようにいつのまにか、それぞれの時代の相撲動向にふれてきている。

ところで大相撲を「国技」と命名した＜先見の明＞も確かだが、それを国技たらしめている要素はほかにもいろいろあるようだ。

なかでも、力士が結う、あの髷（まげ）は決定的ではないだろうか。

髷は非日常的な伝統空間を土俵に現出させる。

たしかに肉体がぶつかり合う競技の側面は大きいにしても、スポーツ刈りの＜選手＞たちが行うレスリングとはまったく違う。

行司の装束なども含め、土俵のすべての様式は髷につながり、そこに象徴される伝統技芸を、私たちは楽しんでもいるのだ。

外国人力士が増え、角界はますます国際化している。

日本人横綱への期待はあるが、白鵬、日馬富士への声援も惜しみなくある。

誰も「国技」をのっとられたように感じないのは、レスラーのようなヨーロッ

パ系の大男だって、角界に入れば、みな髷を結い、まわしを締めて、土俵にあがっているからだろう。

大相撲は、国際化しながら、どこからみても日本の伝統文化につつまれているのだ。

大相撲の土俵に髷を残したのも<先見の明>のひとつだろう。

節分の豆まきには、ちょんまげのおすもうさんがきているだけで華やぐ。

力士が四股を踏むのは、その土地の悪霊を踏み鎮めるためだと聞いている。神事にふさわしく、頼もしい。

今年、鵠沼伏見稲荷にも二人の力士が来たそうだ。健康な成長を願って子どもを、このおすもうさんに抱き上げてもらった若い夫婦がいたかもしれない。

子どもたちが取っ組み合って遊ぶ相撲風景はなくなったが、こうした暮らしの中に相撲文化がなにげなく生きているのがいい。

◆

話を、大正 10 年 5 月場所を記した劉生日記に戻そう。

「定吉という呼出しが世話をしてくれて東方溜りの前へ入れた。すぐ目の前に力士が坐って少し窮屈だが見るにはここが一番」という上等の席である。

幕下の取り組みから熱心に見て、力のこもった勝負はみな記録した。

当然スケッチもしている。

第 26 代横綱大錦と小結紅葉川との結びの一番を記した箇所を、抜き出してみよう。

「紅葉が満身の力で突っ張った時、錦もちょっと弱ったようだったが、左手が入って右に首を抱えるや左からフーッとつりあげた時は、二尺以上も紅葉の体が宙に浮いて見事だった。紅葉川は溜りまでとんで来て、大錦もすべっていた」

まるで実況放送だ。これが日記なのだから面白い。

少年のような劉生を見る思いである。

◆

2013 年、今年の初場所も千秋楽を迎えた。

2 年前の角界の不祥事をのりこえ、人気復活の兆しを見せる大入り満員札止めが、

きょうで５日となった。

きのうすでに、横綱昇進２場所目の日馬富士が 14 連勝で５度目の優勝を決めていたが、やはり東の横綱白鵬との取り組みが注目されているのだろう。

また今場所は、その７日目に昭和の大横綱・大鵬の訃報がとびこんできて、いっそう大相撲へ関心が高まってもいる。

昨年の暮れの衆院選挙で政権が交代したが、やはりこのところの世相は厳しい。政治や経済の行方は不透明だ。

それでも、初場所の、この歓声はうれしい。

テレビ観戦ながら、今年こそはいい年になるようにと土俵に祈りをこめる気持ちがあり、水蔭ではないが「日の本を踏み固め」てほしいと願う。

この土俵を見ながら、ふとそこに二重回し（インバネスコート）を羽織り、頭に中折れ帽、手にはステッキ・・・そんな姿で、身をのりだすように観戦している劉生を想像した。

バーナード・リーチなどとも胸を合わせた劉生のことだから、琴欧洲や把瑠都などヨーロッパ出身の関取もおおぜい活躍する今の大相撲を、大いに面白がっているように思えたのである。

初場所ＴＶ観戦中の、ちょっとした空想であった。

初場所や
郷土の子らの
声もあり

（やまかみ　ひでお）

注：『劉生日記』の引用は現代仮名づかいに改められた岩波文庫版による

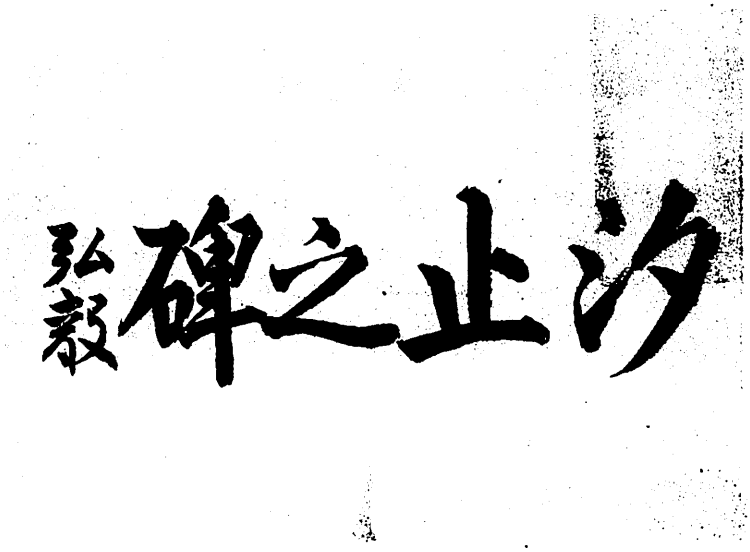
「汐止の碑」の謎

有田　裕一（会員）

はじめに

何年も前のことだが家の土蔵の中を物色していて「汐止之碑　弘毅」と墨書された一紙を発見した。

書は右から左へ横書きで、署名は縦書きである。用紙は縦 31.5 センチ、横 49.5 センチの大きさである。その紙面には縦 15 センチ、横 38.5 センチの枠取りが鉛筆で書き込まれている。私はこれは碑の題字の原稿と直感し、弘毅という署名から揮毫したのは、戦前から鵠沼に別荘を持っていた広田弘毅に違いないと思った。しかし、このような碑は現存しない。



広田弘毅の揮毫による「汐止之碑」

広田弘毅（1878/2/14～1948/12/23）は第 32 代内閣総理大臣《在位期間 1936（昭和 11 年）/3/9～1937（昭和 12 年）/2/2》をつとめ、在任中に文化勲章を制定した。東京裁判で只一人文官出身のＡ級戦犯として絞首刑に処された。茅ヶ崎に住んだ作家、城山三郎著「落日燃ゆ」のモデルとなった人物である。

広田は字がうまく出身地福岡市にある水鏡天満宮の南鳥居の掲額「天満宮」という文字は弘毅が小学生の時に書いた。生涯書を好み、獄中にあっても揮毫を頼まれると「物来順応」と書いたと重光葵は述懐している。

広田は、妻静子の親戚（鵠沼在住だった帝国興信所の後藤氏）の紹介でソ連大使在任中に鵠沼（鵠沼松が岡 1-18-9）に家を構え 1932（昭和７）年秋、ソ連大使退任、帰国後から約１年間をここで過ごした。昭和８年９月、斉藤実内閣の外相就任を機に東京原宿に住まいを移したが、当初は週末には鵠沼に帰った。のちに別荘として利用した。その別荘だった家に再び居住することになったのは昭和20年５月25日の東京大空襲で原宿の家が全焼したからである。

広田が鵠沼を選んだわけは前述したが、広田は静子夫人と結婚したとき新婚旅行に江ノ島に来て一泊した。そのとき夫人に貝細工の指輪を買い「いずれダイヤの指輪を買ってやるから」といったという微笑ましいエピソードが「落日燃ゆ」に紹介されている。広田夫妻はともに福岡博多の出身だから、海に近く、しかも結婚記念の江ノ島が見える鵠沼を気に入ったであろう。静子夫人は東京裁判で弘毅が起訴された段階で、判決を待たずにここ鵠沼の家で自害している。広田の刑執行に先立つこと２年７ヶ月であった。この家に遺族で最後まで残られた広田正雄夫妻も平成13年７月に鵠沼を去られた。

有田商店は商売の面で広田家へ出入りしていた。それは総理の別荘というには余りにも質素な、しかし広田の清廉潔白な生き方を象徴するような、ごく平凡な和風の家でした。外交官試験に同期に受かった吉田茂の大磯の別邸とは対照的である。広田亡き後は、そこには広田の二人の息女と三男の正雄、厳水（いずみ）夫妻が住まれていたが、私がこの書を見付けた頃は、正雄夫妻のみが住んでおられた。私はこの書が広田弘毅の自筆かどうかを配達の折に持参して夫人にこの旨を尋ねると、奥の部屋におられた正雄氏に見せに戻られ、しばらくして、「まちがいなく父の文字である」とのご返事を頂いた。

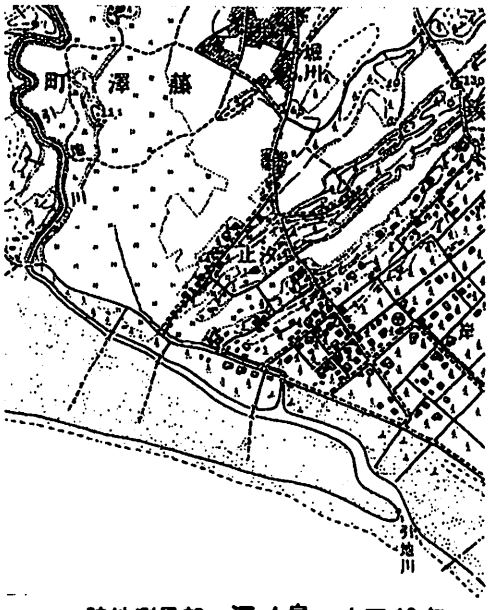
「汐止之碑」とは何であろうか？

まず「汐止」という記載のある資料を調べてみた

a)「汐止」または「汐留」の記載のある地図を探したところ、とりあえず８種類見付かったので以下の２ページにまとめた。探せばもっと存在すると思われる。

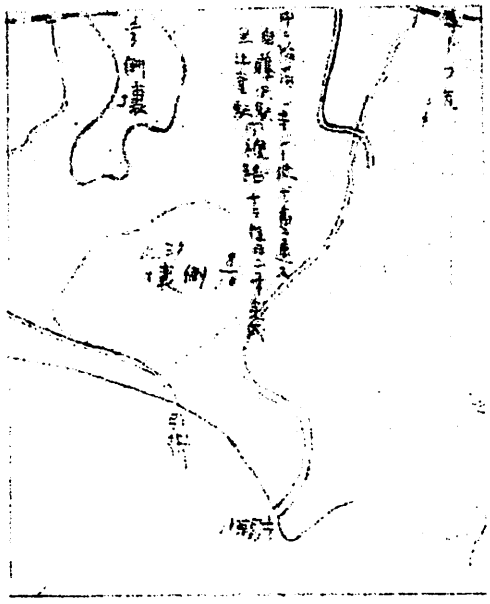
昭和世代の鵠沼生まれの誰もが知らない「汐止」という地名が、驚くことに昭和40年代になっても地図上では生きていたことが判明した。

「汐止」「汐留」の記載のある地図　（1）



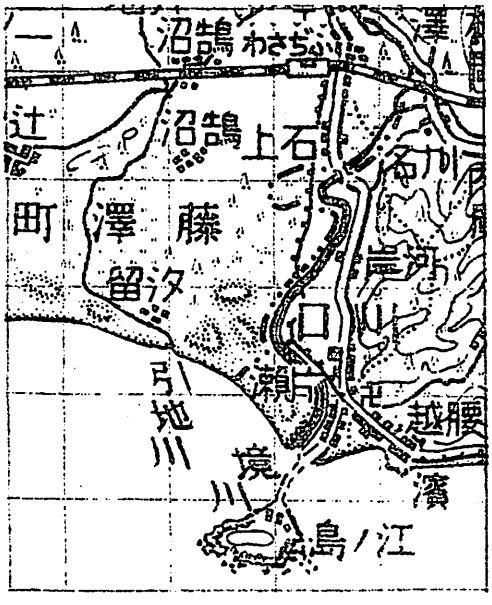
陸地測量部　江ノ島　大正 12 年

大正 10 年 測量

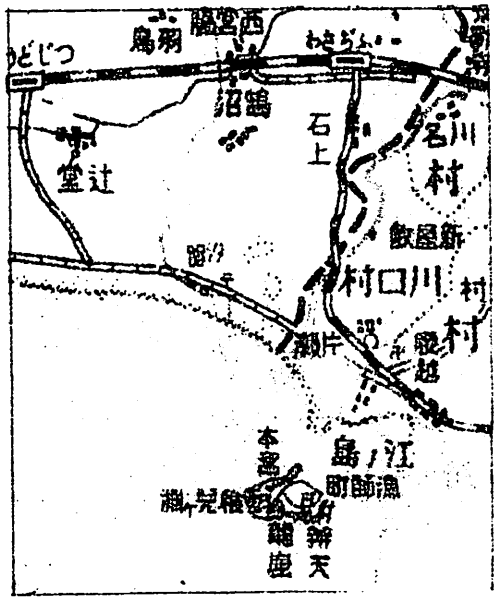


陸地測量部　震災地応急測図 大正 12 年

平成 20 年 日本地図センター複製



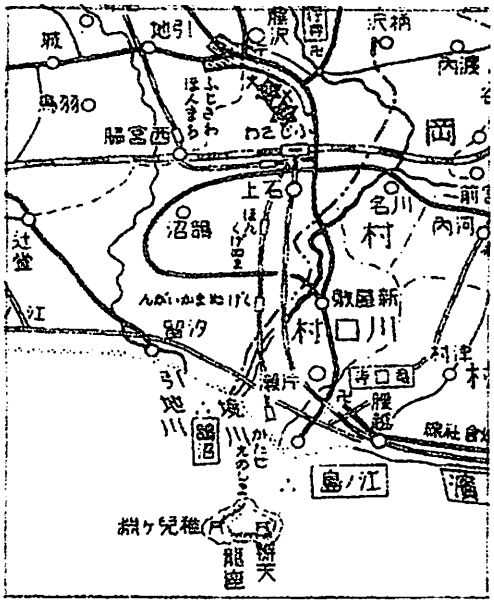
出典不詳　昭和 4 年以前



神奈川交通地図　昭和 2 年

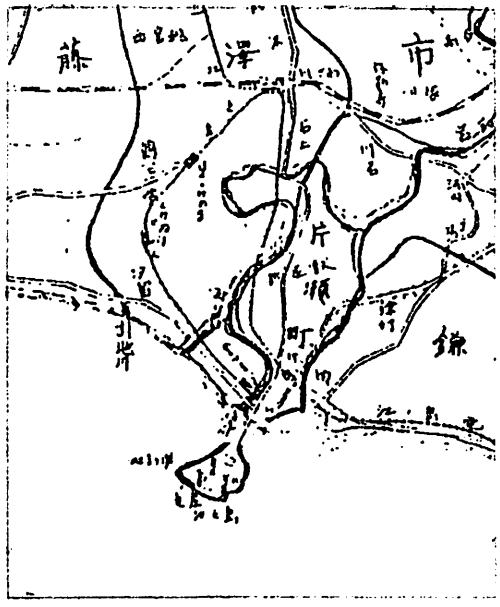
横浜貿易新報付録

「汐止」「汐留」の記載のある地図（２）



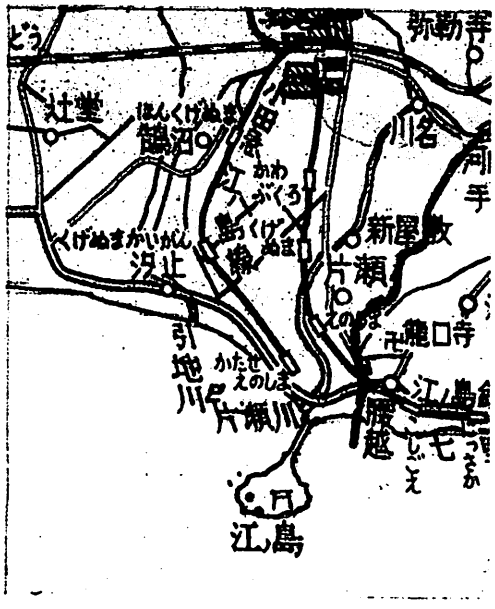
神奈川交通地図　昭和４年

東京日日新聞社



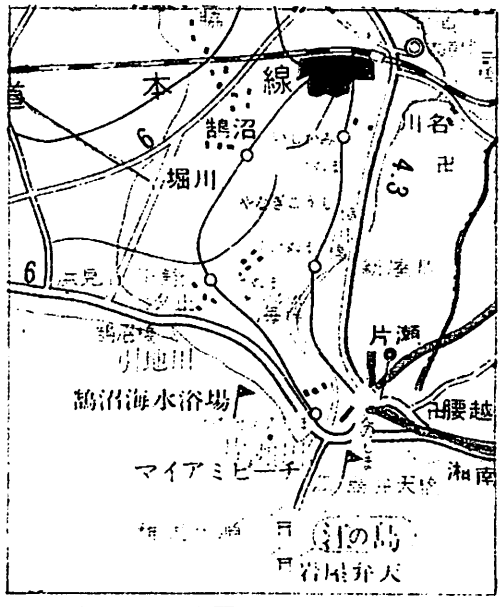
大藤沢市建設予定図 昭和15年

初代藤沢市長 大野守衛 私案



最新神奈川全図　昭和30年

発行者不明



神奈川分県地図　昭和43年ころ

国際地学協会

b）鵠沼の「**汐止**」または「**汐留**」「**潮留**」を含む記載のある文献を４篇、発見したので以下に紹介してみよう。

1）「藤沢の地名」（昭和62年刊 日本地名研究所編）という本には、「**汐止通り**」と「**汐止**」という地名が存在したが図示本文ともに省略したと記述されている。解説する資料が得られなかったのであろう。

2）「藤沢史談」第十号、鵠沼はなし(2) 服部清道（著）には

「現在鵠沼には引地、上村、宮の前、清水、宿庭、苅田、大東、中東、原，堀川、納屋、**汐止**、東仲通、郵便局通、藤ヶ谷通、停留所通、小川町、熊ヶ谷通、宮崎町、高松通、新旧花沢町、砥上の小字がある。（中略）かの小田原役帳に岩本太郎左衛門の知行七十三貫七百六十七文の東郡鵠沼は、けだし、引地、上村、宮の前、清水、宿庭、苅田、あたりから南は納屋、**汐止**あたり、東は砥上あたりまでの地域であったろう。納屋、**汐止**あたりは相模風土記に「村民農隙には魚猟を専とす。船役永銭を納む」と記され、隣村辻堂など七ヶ村とともに江ノ島周辺の入会漁場に出漁した足溜まりであった。」（以下略）との記述がある。

3）鵠沼の作家・今井達夫はその著「鵠沼物語」のなかで

「鵠沼海岸地区はそのように若干の松の木が生えているだけの砂地原で、彼（筆者注：伊東將行のこと）が植樹したものであろう松苗の成長したのと、それ以前からの松とは、はっきり樹齢の差を示している。そういう海岸地区と本村と称する農村地区との差もはっきりと区別することが出来る。農村地区に移住者たちの住居が建つようになったのは、昭和になってからといっても大きな誤りはない。海岸地区に大小の別荘が建ち並び旅館が出来てからでも農村地区を本村と呼んで、土地の人たちは区別していた。その両者を区切る道を**汐止の通り**と名付けた由来はわからないが、その道の本村側の大きな農家のはなれで育ったのが女流作家の内藤千代である。」と述べている。

4）「皇国地誌」相模の国高座郡鵠沼村（明治12年編纂）「橋」の項に、引地川に架かる橋として引地橋（長さ13間、幅2.5間）神村橋（長さ14間、幅４尺）清水橋（長さ15間、幅５尺）作場橋（長さ15間、幅６尺）等に次いで**潮留橋**について以下の記述がある。

潮留橋：西南隅字鰯干場ニアリ引地川ノ下流ニ架シ漁路ニ供ス長二十五間、幅五尺板梁ニシテ修繕民費ヲ以テス

「**潮留橋**」は、まさに浜道が堤防に突き当たるところに架けられていた

と思われる。今の「竜宮橋」近辺ではないかと推測される。また、その長さ25間、幅5尺という規模は引地川に架かる他の橋に比べて断然長い。

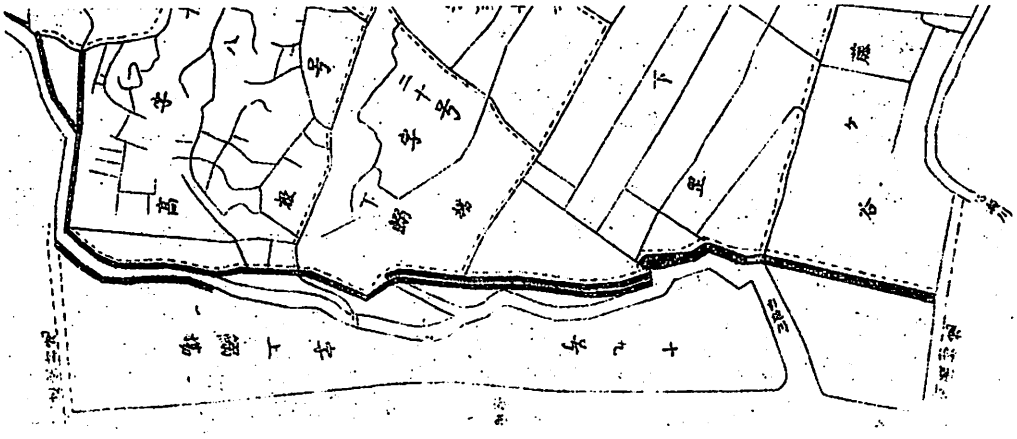
この地域に住む住民は、農隙に魚猟を専とす（相模風土記）というから、**「汐止め通り」「潮留橋」**は重要な生活道路・橋であったに違いない。

「汐止」という地域

いくつかの地図を示したが、**「汐止」**という文字は、いずれも引地川河口付近の左岸内に印刷されている。

文献上は、「藤沢の地名」でも「ある地域」を指す地名として扱っている。「藤沢史談」では「納屋」**「汐止」**をひとくくりに説明しているが**汐止**は位置的には納屋の南に隣接した地域をいったようだ。「藤沢の地名」「鵠沼物語」の**「汐止めの通り」**とは、今もいわれる「浜道」（旧字の下鰯と高根の字境の道）の別称だったのであろう。この道を浜道と呼ぶのは古く、文政5年、相模国準四国八十八箇所（山上本）のなかに、第25番「浜道　地蔵堂」。原の地蔵堂から「これより眞南へ家の中をつき当たり西の方大道へ出、たつたつと行くがよし。七丁二十六間」と順路が記されている。ここにいう大道とは浜道である。

明治15年の「鵠沼村縮切図」には引地川には堤幅4間と書き込みのある堤防が図示されているし、昭和5年「鵠沼全略図」には川幅4間をはさむ土手は両側各4間、浜道は幅2間と記入されていて、この堤防に突き当たる。



鵠沼村縮切図（黒い帯状部分が堤を示す、寸法は字毎の詳細図に記入されている）

引地川について

皇国地誌には引地川について次のように記されている。「水源ハ本郡草柳村字土

井頭ニ発シ、円行村石川村ヲ流レ大庭ノ地ニ滙(じゅん)シテ一湖トナリ大庭城ヲ囲繞シ湯桶口ヨリ赤羽根村へ落。室田高田円蔵ヲ経、茅ヶ崎ヨリ海ニ入リシガ廃城トナリシ後、各村ニテ彼湖開墾ノ際更ニ山脈へ流大庭ヨリ直チニ本村へ疎通シ海へ流セシモノ故ニ引地川ト称ス。サレバ此山ニ架セル引地橋修繕ノ時ハ大庭赤羽根円行高田香川下大曲中瀬岡田大蔵小谷倉見七ツ木石川等十三村ノ民費ヲ以テ仮橋ヲカケ来リシナリ。曩(さき)ニハ土橋ナリシヲ明治九年、今ノ板橋トナス。北ノ方、大庭稲荷両村ノ界ヨリ我字引地ニ来リ北ヨリ南へ曲流シ南地ヲ貫キ西南々ヨリ東京湾（ママ）へ流ル。其長三千二百二十七間、幅八間ヨリ流末二十間ニ及ブ、深サ三尺或ハ七尺、急流ニシテ清ク潮汐干満スレドモ船筏通ゼズ」と、川の名称の由来と流路、規模が詳述されている。「船筏通ぜず」は今もそうであって、片瀬川と異なり、引地川では船舶は見られない。

また同誌には鵠沼の地味として「概知細砂其色茶褐混淆シ其質下等稲麦薯及ヒ桃茶ニ適シ粱瓜ニ可ナリ水利尤不便ニシテ旱魃ニ苦ミ中(なかんずく)地ノ低キヲ以テ東西両川ノ洪害ヲ恐レ南部ハ暴風潮溢モ亦憂ウ」と記されている。

昭和９年２月建立された「引地川改修紀功碑」には「引地川は紆余曲折して流水の疎通良好ならず、一朝豪雨に会えば堤防決壊して濁水氾濫し、年々農作物を害す、また屡々鵠沼別荘地を浸して住民を苦しむ。乃ち引地川の改修は藤沢町多年の宿題なりしも、町財政は之が工費の負担に堪えずやむを得ず年々数千円を投じて応急修繕を反復し（中略）町理事者は県当局に対し、引地川の改修を懇請し、（中略）昭和七年度に於いて金三万二千円、翌八年度に於いて金三万六千円を配当せられ昭和九年二月引地川下流延長約一千間の改修を完了せり。（後略）」と一木町長が碑文に書いているように、まさに暴れ川であった。

「汐止」の意味

「広辞苑」を引いても「しおどめ」という項目はなく「しおどまり（潮止まり）」という語が記載され《満潮または干潮時に、潮が満ちも引きもせずに一時止まること。停潮》と記されている。つまり自然現象をいう言葉である。

「大辞林」には「しおどめ」として《干拓工事で海水を堰き止める堤防》と解説され、これは人為的工作物を指す言葉である。

ちなみに、「しおどめ」という地名を「大日本地名辞書」吉田東伍著で調べると、東京都の汐留、横須賀市の汐留、埼玉県南埼玉の潮止しか記載がないが、この３

か所も行政上の地名として現在残っているものはひとつもない。

また、小林政夫会員は河川の流れと上げ潮時の遡流が拮抗する地点を汐止めといい、そういう地名は方々にあるはずだが、狭小な範囲を指す場合は地名辞典には取り上げられないのでは、といわれる。

皇国地誌に潮溢という言葉が使われているが、台風など低気圧による高潮と満朔月に起こる大潮とが重なれば、引地川下流域に潮が溢れ、それを阻止する堤防が**汐止**であろうし、堤防に守られる地域を**汐止**と呼んだのではないだろうか。

鵠沼の「**汐止**」が、「大辞林」にいう人為的工作物をいうのだとすれば、引地川の治水目的で作られた堤防をいうのであろう。通常、河川の堤防は上流からの急な増水対策であるが、川口付近の堤防は、それに加えて干満の潮位変動に対処するためのものであるとすれば「**汐止**」という呼称は当を得たものといえるし、鵠沼の「**汐止**」という地名は「**汐止めのあるところ**」あるいは「**汐止めによって守られる地域**」を指すようになったと考えられる。

以上、資料による「**汐止**」は、いずれも、「或る地域」を表す地名であり、「**汐止めの通り**」とはその地区を通る道であり、「**潮留橋**」は前述のように**汐止めの通り**の延長上に架かる橋の呼称であった。

しかし「**汐止の碑**」という表現は、或る地域を表すとは思えず、《もっと狭い特定の場所を示す碑》か《**人為的工作物である「汐止(堤防)」を記念する碑**》と考えるのが自然である。

「汐止之碑」という題文が書かれたいきさつを推理する

鵠沼では「**汐止**」という場所または地名を残そうと碑の建立の動きがあり、広田に碑の題文の揮毫を依頼し、題文は出来たものの、何らかの事情で建立は中止となった。碑建立の動きとは、例えば、河川改修とか、地名変更の動きがあったとか、前からあった碑が震災の津波で流失し再建の動きになったとか、色々考えられるが、今まで述べてきたことから最も考えられそうなシナリオを推理して見よう。

1）明治時代すでに引地川には堤防（鵠沼村縮切図）があり、それを「**汐止**」と呼んだ。

2）それにより潮溢をまぬがれる地域を「**汐止**」と呼ぶようになった。

3）昭和 7～9 年、河川大改修（流路変更を含む）がおこなわれ、不要となった古い堤防が残った。

4）それを撤去することになり、その跡地に「**汐止**」があったことを示す記念碑建立の動きが起こった。（昭和 12〈日中戦争始まる〉～3 年頃？）

5）碑の題字を広田弘毅に頼んだ。恐らく碑文も誰かに依頼したであろう。その原稿でも見つかれば、詳細がわかるのだが…。

6）時局は戦火激しくなり、それどころではなくなり何時の間にか、この計画は中断されたままになった。

7）よって有田家に碑の題字の原稿だけが残った。

というものだが、読者はどう思われるであろうか。

なぜ広田に揮毫を頼んだか。それは広田が鵠沼の別荘に静養に来る首相だったからであろう。とすれば書かれた時期は首相在任中か、首相退任後の比較的早い段階ではないだろうか。揮毫を広田に依頼したのは、広田家に商用で出入りし、なおかつ藤沢町町会議員であった祖父・有田金八であったろう。でなければ私の家に碑の題字原稿が残っているはずがない。

謎は深まるばかり

以上、広田書については一応の推論を試みたが、まだまだ分からないことが多々ある。たとえば以下のような事柄などである。

1）鵠沼の「**汐止**」は地名以外に、工作物があったか、それはどこか。

2）碑建立の動きとは何であったか。いかなる事情で中止になったか。

3）建てようとした場所はどこであったか。

4）地図に載るほどメジャーだった地名がなぜ忘れ去られたのか。

など、これらは今後、調査したい課題である。

おわりに

今まで 80 歳代の何人かの方に「**汐止**」について訊ねてみたが皆さんご存じないという。読者の中で「鵠沼生まれ、鵠沼育ち、90 歳以上で、お元気な古老」をご存知の方は是非「**汐止**」について訊いて頂きたいと思います。

なお本稿執筆に当たり、岡田会員に資料収集など協力を得た。

（ありた　ひろかず）

〔研究論文〕

鵠沼海岸でのサーフィンの発祥前史

小林 勝法（会員）

はじめに（研究の目的と方法）

サーフィンはポリネシアに広く普及していた波乗りの技術で、ハワイ王国においては重要な伝統文化として継承され、余暇活動としても頻繁に行われていた。しかし、布教にきたキリスト教宣教師たちに、「享楽的だ」としてサーフィンは1820年代に禁止されてしまう。その後、1900年頃に復活したサーフィンは米国カリフォルニアとオーストラリアに伝播し、当所の若者に受け入れられた。サーフボードの素材や形状などの製造技術の発展に伴い波乗り技術も高度化し、競技化されて近代サーフィンとなった[1]。日本には太平洋戦争後の米国軍人によってもたらされ、湘南や千葉などの各地で発祥した。日本で最初にどこで始められたかについては諸説ある。例えば、日本で最初のサーフィン入門書である『たのしいサーフィン』(1971年)には「1960年頃、湘南および千葉に在日外国人によって紹介されたものと、1965年北米のポートランドのデパートで、日本の船員が買ってきて、山形県で始めた二つの系統に分かれます」と記されている[2]。また、映画『ハワイの若大将』(1963年、東宝)で見事なサーフ・ライディングを見せた加山雄三は、1968年に開かれた全日本サーフィン選手権第３回大会プログラムに「小さいときから映画や文献でサーフィンを知り、今から８年ほど前に自作して乗った。日本で自分が最初ではないか。」と寄稿している[3]。加山の言う通りだとすると1960年頃にサーフィンをしたことになる。そして、さらに古いものとしては映画監督の小津安二郎の定宿として知られる老舗旅館「茅ヶ崎館」（神奈川県茅ヶ崎市）には日本最古のサーフボードとして伝わる板が保存されており、傍証とされる写真から1935(昭和10)年頃のものだとされている[4]。この板でサーフィンをしたかどうかは確かめられていないし、その目撃証言もないが、サーフィンした可能性は否定できない。

個人的にサーフィンをしたと言う場合、個人の記憶に基づく証言が中心であり物的証拠や目撃証言などが乏しい。それゆえにいくつもの発祥説があるのだが、そういう中で日本の代表的なサーフスポットであり、サーフィン発祥の地のひとつと言われている神奈川県藤沢市鵠沼海岸の内藤喜嗣の事例は本人が郷土史研究家であるということもあり、記憶が詳細で、物的証拠や状況証拠など傍証にも富

んでいる。本人は地元の地域コミュニティ誌に自身の体験を「鵠沼海岸でのサーフィンはこうして始まった」[5]として綴っているし、サーフィン関係の資料を収集し、鵠沼市民センター鵠沼郷土資料展示室に展示している。そこで、本研究では内藤への聞き取り調査をもとに、当時の時代状況などから歴史的検証を加え、サーフィン発祥直前の様子をできるだけ正確かつ詳細に記録することを目的とする。なお、おもな聞き取り調査は2012年10月２日、19日、23日に藤沢市鵠沼市民センター鵠沼郷土資料展示室にて行った。

１．内藤の生い立ちと郷土史研究への貢献

内藤は1935(昭和10)年11月21日に藤沢市鵠沼下岡(当時)で長一と恒子の三男として誕生した。三男四女の真ん中であった。生家は現在の同市鵠沼海岸一丁目で少年時代は家から海まで建物が何もなく、水平線が一望できたという。図１では生地を★で示してある。同年同月には鵠沼海岸で横須賀鎮守府所属の海軍陸戦隊が上陸演習を挙行しており[6]、軍靴の足音が高まる中で生まれ、幼少時代を戦時下で過ごした。９歳の時の1945年２月には湘南地区にも米軍機が来襲し、空襲が日常化していった。

誕生した1935年ころの鵠沼海岸一帯は砂丘となっており、県有地であった。海岸は県立湘南海岸公園として整備されつつあり、現在の国道134号線に相当する湘南海岸道路(鎌倉郡片瀬町(当時)から大磯町までの湘南大橋を除く区間)が開通したのが1935年である。

幼稚園から高校まで近くの湘南学園に通ったが、日常は近所の子供たちと魚釣りや虫取り、野球などをして遊び、夏になると波乗りをしていたという。

鵠沼の沿岸部は江戸時代は砂地であり、幕府の鉄砲場であった。因みに茅ヶ崎市の柳島には船着き場があって、そこから陸揚げした鉄砲（大砲）を鉄砲場まで運んだ道が今でも鉄砲道と呼ばれている道である。明治時代になるとその砂地が別荘地として開拓された。皇族や華族、政財界の大物のほか、芥川龍之介や岸田劉生など多くの文人も逗留又は生活した。そのような鵠沼の歴史に関心を持ち、時代とともにめまぐるしく変化する海岸の記録を残そうと考えた内藤は、郷土史の研究会である「鵠沼を語る会」（1975年11月設立）に入会し、『鵠沼海岸開発史の概略』（2001年）[7]や『鵠沼海岸商店街100年の歴史』（2001年）[8]などをまとめるなど多くの業績を残している。そして、2011年度まで同会の会長を務めていた。サーフィン関係の資料を収集し、公民館で展示を開いたこともあって、ジャーナリストや研究者から取材を受けることも多い。

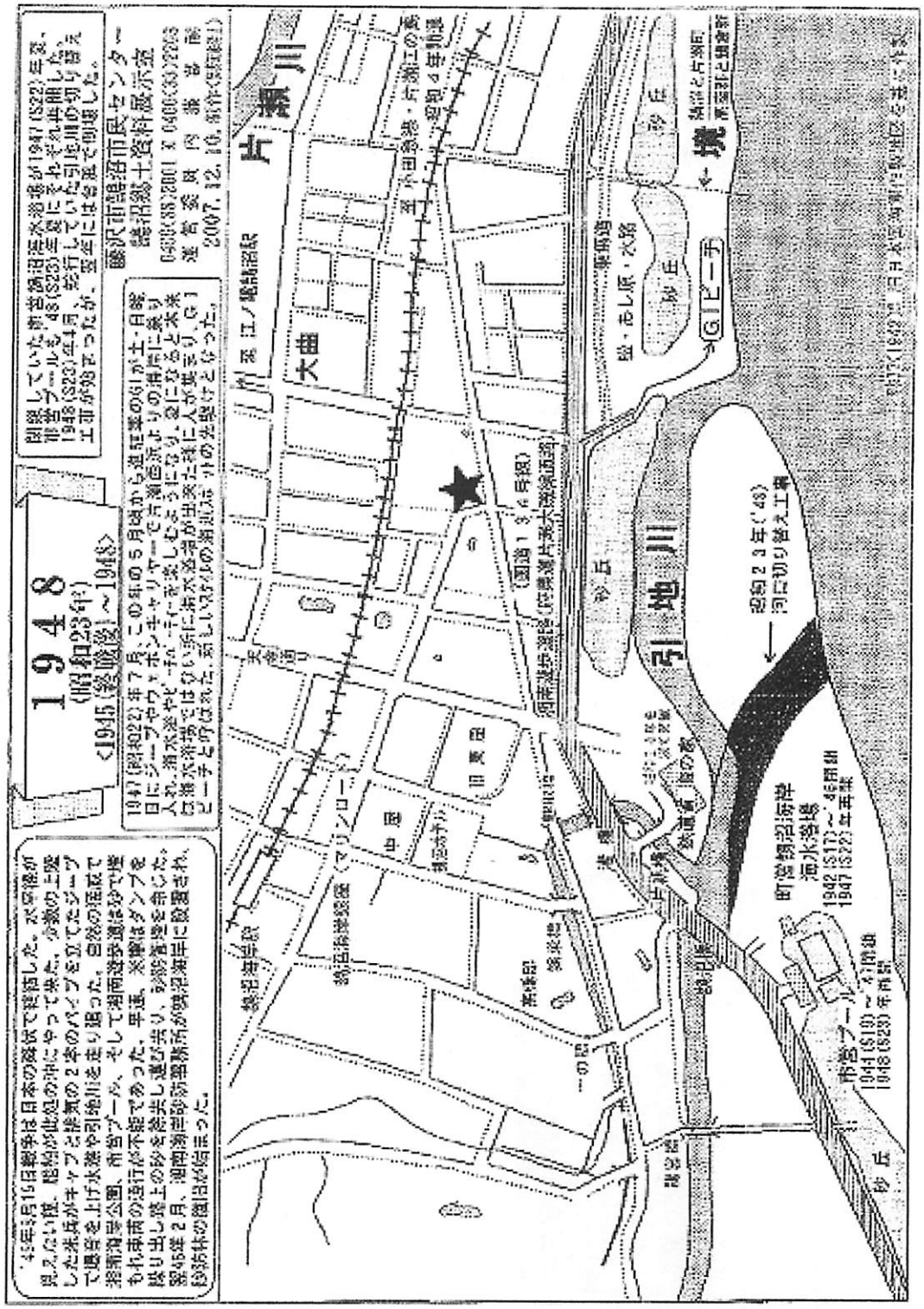


図１　鵠沼海岸（1948年）

2．日本の波乗り：サーフィン前史

現在行われているような近代サーフィンが日本に伝わる前から日本各地で波乗りは行われていた。茨城民俗学会が編んだ『子どもの歳時と遊び』（1970）には「波のり」の項があり、「遠あさの海岸でないとできない。ちょうどせんたく板くらいの板を腹にあてて両手でつかみ、好みに合った波を待って、波とともに岸辺まで帰ってくる。」と説明されている[9]。記録に残っている波乗りとして最も古いのは、山形県鶴岡市湯野浜で江戸時代の1821年に、酒田の俳人が湯野浜でつけた湯治の日記の中に「瀬のし」と呼ばれる一枚板での波乗りが行われた様子を綴った記録が残っているという[10]。また、東京都新島では漁船の床板、これを板子と言うが、これを使った「瀬つかし」と呼ぶ波乗り遊びが1960年頃（昭和30年代前半）までされていた[11][12]。また、鳥取県浦富海岸でたくさんの少年が板を使った波乗り遊びに興じている映像が残されている。1932（昭和７）年に撮影されたものと言う[13]。

その板子が保存され、神奈川県の大磯郷土資料館に展示されている(図２参照)。大磯は、軍医総監松本順の推奨によって、1885（明治18）年に本格的な海水浴場が開かれた。現在の海の家に相当する「お茶屋」が設けられ、そこでは、地元漁師の子弟などで海水浴客の安全を守った青年が客に泳ぎ方を教えており、板子も貸し出されていた。この波乗りは長く続き、1930（昭和5）年から数年の様子は『大磯の仲間たち－これが波乗りだ－』に詳しい[14]。夏の間、別荘の子供たちが集まって波乗りに興じており、波に乗る爽快感や波に飲み込まれ揉まれるスリルを男女問わず楽しんでいたようである。渦巻く大きな波をロールキャベツと呼んだり、「横板で乗る」などの乗り方の思い出が綴られている。

図２　板子

鵠沼海岸では1909（明治42）年の絵はがき（鵠沼郷土資料展示室所蔵）に板子を持って波に乗ろうしている少年の姿が映っている。また、当時の流行作家であり、鵠沼に在住していた内藤千代子（1893-1925）は当時の人気月刊誌『女学世界』に連載した「生い立ちの記」に波乗りについて次のように記している[15]。

何と云っても一番待ちかねて楽しかったのは夏季の海水浴でした。當地の海は遠浅ですけれど割合浪が荒いので『浪乗』には持ってこいなのです、痛快ですよ。板子一枚に身を託して、小山の様な大浪と共に、つーと岸邊をさして突進する愉快さ。抜手を切って泳ぐ、浪の底をくぐりつこする、流石女の児で、頭髪のことが少し心配になりましたけれど、そんな事は最初の中、興がのって來れば夢中になつて了ひます。

この記述から明治時代の後期にも子ども達が男女の区別なく波乗りをしていた事が確認できる。

内藤が物心ついた時にも内藤家にも波乗り板が何枚かあったという。父・長一が役員を務める(株)松屋（本店銀座）の若い社員達が夏休みになると海水浴に内藤家を訪れ、波乗りをしていたからであった。海の家でも浮き輪などともに貸し出しされており、青少年が波乗りに興じていた。板は使っていると徐々にすり減って３年くらいで使えなくなるので作り替えることになるが、内藤は小学校高学年になると自作するようになったという。その板は海水につけても湾曲しないように杉の柾板(木目がまっすぐに通った板)で作り、寸法は図３に示す通りであった。家庭で使う洗濯板より一回り大きい。

板子を使った波乗りは、通常は板の上に腹ばいになって乗るのだが、他の方法もいろいろあった。内藤によると、それらは、「横板」や「板抜き」「板返し」と呼ばれていた。横板とは板を横向きに、つまり体とは十字になるように90度回転させて乗る方法である。そして板抜きとは板の両脇を持って腕を伸ばして板を体の前方の方へ押し出して乗る方法で板返しは板をさらに前方へ移動させ、把手となる穴に片手を入れて、片腕で体を支えながら乗る高度な方法である。さらに、難しいのは「素乗り」と呼ばれる板なしで乗る方法である。これは現在のボディ・サーフィンに相当する。そして、このような様々な乗り方を見物する人たちもいたという。

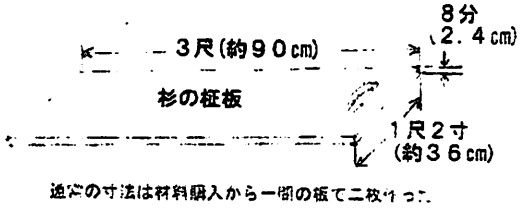


図３　板子寸法

３．サーフィンの出会いと杉板での自作(1947年頃、12歳頃)

内藤がサーフィンを知り、チャレンジし始めたきっかけの一つについて、内藤は次のように記している[5)]。

「1947年のクリスマスから、あの綺麗なカラー写真が満載で黄色の表紙で有名

な国際地理学会のナショナル・ジオグラフィック・マガジンが米軍の佐官のMr. Davisのプレゼントで我家に毎月届くようになった。この中にハワイでのサーフィンの紹介の写真が鮮明に掲載されていた。背丈の倍ほどのボードを背中に立てかけて５人並んで写真に収まったサーファー達、ビッグ・ウェイブを捕らえ、ボードの上に立って波に乗り滑走する姿など６枚の写真を目にしたとき、驚きと挑戦心が沸き起こった。そして、この時、初めてサーフ・ライディングなる言葉も知った。」

1947年とは内藤が12歳の時のことである。戦後まもなくのことで、普通の少年が目にすることがない米国雑誌を見ることができたという希少な環境が幸運してサーフィンと出会えた。内藤の父の長一はハーバード大学で経営学を、メーシー百貨店(ニューヨーク)で実務を学んでおり、米国にも多くの知人がいた。そのために戦後間もないときでも米国人との交流があったのである。

内藤は古雑誌を処分してしまったとのことなので、この記憶を頼りにして『ナショナル・ジオグラフィック・マガジン』のバックナンバーを探したところ、1947年頃の記事として２件見つかった。一つは、1935年５月号に掲載された「ワイキキの波とスリル」と題する８枚の写真である[16]。１枚は１人のサーファーが自作した背丈の倍もある６枚の板を立てかけた前で撮った写真である（図４参照）。６枚は男女が水着でサーフィンしている写真で、中には二人乗りしているものもある（図５参照）。最後の１枚はアウトリガー・カヌーで波に乗っている写真である。

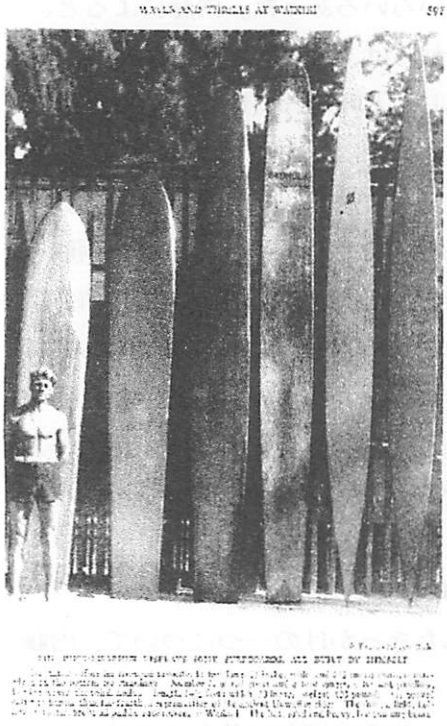


図４　ハワイのサーフボード

図５　タンデム

図６　カリフォルニアのサーファー

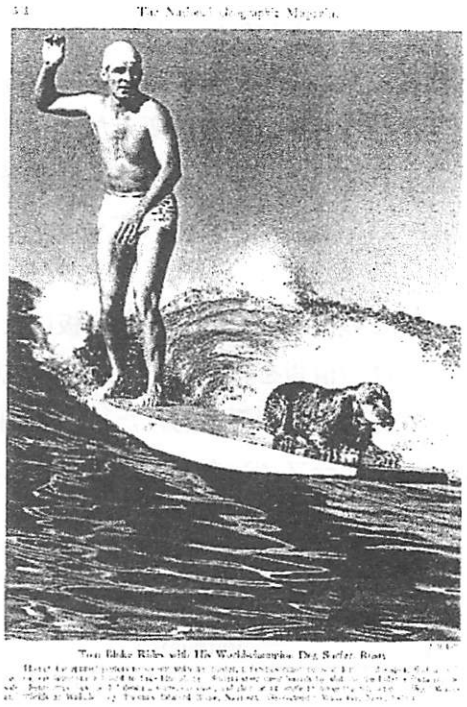


図７　犬と一緒に

もう一つの記事は、1944年９月号に掲載された「カリフォルニアのサーフボーダー」と題する８枚の写真である[17]。華麗にライディングする一人の男性をクローズアップしたものやビッグ・ウェイブに挑戦しているもの、犬とライディングしているものなどである（図６、図７参照）。

1930年から1950年までのバックナンバーを調べたが、この２件の他はなかった。この２件は、内藤が記述している「1947年のクリスマスから」や「５人並んで写真に収まったサーファー達」「６枚の写真」とは食い違っている。そこで、この２件の記事を内藤に見せたところ、「自分が見たものは1944年のこの写真である」と証言した。上記の記述は少年の頃の記憶なので、多少の思い違いはあるだろう。「毎月届く最新版の他に、ライフやグッドハウスキーピングなどのバックナンバーももらったことを覚えている」と述懐した。したがって、内藤が戦後まもなく米国雑誌のバックナンバーでサーフィンに出会ったことは確かである、と考えられる。

この一連のサーフィンの写真を見た内藤は、自ら記しているように「驚きと挑戦心が沸き起こった」という。そして、実際にサーフボードづくりに取り組むのである。その様子は「探検隊」に詳細に記されているが、概略は以下の通りであ

る。工務店で大きな杉板（約45cm×３cm×260cm）を購入し、写真を見ながら先頭部と後部の形を整え、海に浮かべてみるが重くて海面すれすれにしか浮かばなかった。それでも乗る位置を変えたりして１週間ほど挑戦したものの、結局はあきらめて、自作サーフボードの第１号は庭の木陰のバーベキュー場のテーブルとなってしまったと言う。しかし、この後にももう一枚作成しているとのことであった。

４．ＧＩとの出会い(1951年)と合板による自作(1952年、16歳)

写真だけの情報を頼りにした最初の挑戦はあえなく失敗に終わったが、「次のきっかけが1951年の夏に訪れた」と内藤は記している[5]。内藤が15歳の時である。鵠沼海岸でサーフィンをしている進駐軍の米兵を見かけ、声をかけると彼らは日系二世で片言の日本語が話せたという。彼らのボードはくさび形をしていて長さが３m程で、ベニヤで作った張り子のものだった。随分重かったが、浮力もあった。彼らはフナコシとマツイという名で、翌週も米軍座間基地からジープにボードを積んで海岸に現れた。友人の前沢長継と一緒に乗り方を習い、さらにその夏の終わり頃に彼らのボードを１週間借りることができた。午後から吹き出した強風のため、ボードをジープに積んで帰ることが困難になったためにボードを預かったのである。そして、このチャンスを活かし、ボードの寸法を測り、スケッチして、翌年に向けてボードの作成に取り組むことになった。木材が乾燥するまで４ヶ月かけたり、接着剤を工夫したり、防水や水抜き栓を工夫するなどして作成し、翌年の1952年５月から海で波乗りを試し、さらに改良を加え、７月に初めて自前のボードでサーフィンできたという。16歳の夏であった。そのボードの設計図が図８である。これは何回か作成した合板空洞タイプの完成形であり、内藤のスケッチに説明文を筆者が加えた。全長約250cm、幅60cm位、厚さ8cm位の中空構造で、後尾にはスケッグ(フィンのこと)が付けてある。また、前方と後方に水抜きの穴を開けてあった。

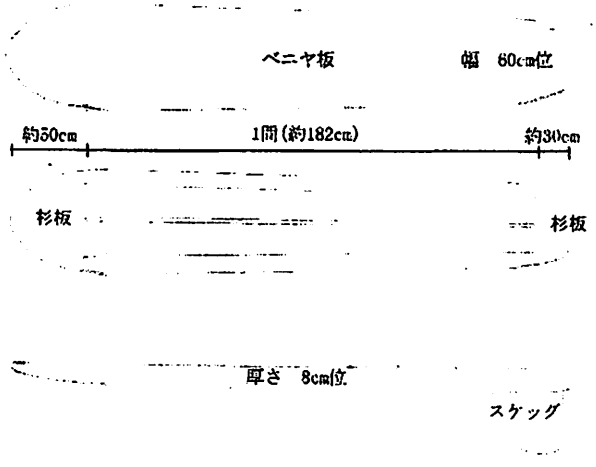


図８　ベニヤ・ボード

米兵が鵠沼海岸でサーフィンをしていた場所は当時ＧＩビーチと呼ばれていた

場所である（ＧＩとは米兵の愛称である）。内藤が作成した1948年頃の地図が図１(鵠沼郷土資料展示室提供)である。当時の海水浴場は片瀬海岸西浜と鵠沼海岸と２つに離れており、その中間は遊泳禁止区域となっていた。その一箇所に米兵が土日になるとジープなどで乗り込んで、まるで海水浴場のように賑わっていたという。その様子が図９の写真(鵠沼郷土資料展示室提供)である。戦前戦後の藤沢の様子を丹念に撮り続けていた福地誠一による1947年の写真で、米兵が乗ったジープの横には日本の子どもたちが集まっており、その背景には江ノ島が写っている。鵠沼海岸ではこのように米兵と日本人の子どもが交流していたが、このようなことは全国各地で行われていたことであろう。全国各地で同時期にサーフィンが発生したことは十分考えられる。なお、鵠沼海岸では内藤と前沢の他に米兵にサーフィンを習うような青少年は見当たらなかったとのことである。

図９　ＧＩビーチ

５．ウレタンフォームでの自作(1961年、25歳)

合板空洞タイプでライディングできた内藤だが、翌年は受験勉強に時間が取られ、その翌年は大学に入学して馬術部に入ったため、サーフィンをする回数が減り、関心も薄れていた。しかし、サーフィンの世界ではそのころ、革命的な発展期を迎えていた。米国カリフォルニアでＦＲＰコート製のボードが作成されるようになったのである。ＦＲＰとはガラス繊維と不飽和ポリエステルから作られる強化プラスチックのことで、これを使ってポリウレタン・フォームから成形したボードをコーティングする工法が開発されたのであった。これによって浮力が著

しく増加したので、板の大きさを小さくすることができ、ライディングしながらの方向転換が容易になった。

内藤はこのような米国の情報を米国雑誌から得ており、サーフィンの専門誌が刊行されていることを知るとすぐに購読する。内藤は次のように記している[5)]。

「当時、東京駅丸の内南口にあったアーケード内の輸入雑誌専門店にオーダーし、２ヶ月後に手に入れることができた(以降３年ほど購読していた)。」

そして、そのサーフィン雑誌の記事の中にボードの自作方法があるのを見つけた。内藤は次のように記している[5)]。

「ボードの宣伝の他に、ＤＩＹの為の一式揃ったキットの通販広告が目立った。中でもアメリカのクラークフォーム社は記事として、ボードの作成プロセスと自社のキットでの製作方法を指導していた。」(引用者注：ＤＩＹ=Do It Yourself)

内藤はこのときには既に就職していたが、サーフィンへの挑戦心が再び点火したのである。早速、サーフボード・キットの輸入を考えたが、当時は個人輸入が認められなかった。そこで、日本で手に入る材料を揃えて自作を試みるが、困難が多かった。グラスファイバークロスと不飽和ポリエステル樹脂は義兄が勤める日立化成(株)から、ポリウレタン・フォームは知人を通じて積水化学(株)から調達できたものの、フォームの成型では苦労した。ポリウレタン・フォームの余分な部分を切り落とすために電熱による切断機を自作しなければならなかったし、日立化成(株)の樹脂、薬剤と積水化学(株)のフォームの相性が合わずにはじめから作り直さなければならなかったりした。

苦労の末、ようやく1961年の５月末に完成したものの、内藤は急性盲腸炎に罹ったため、結局、７月まで待たなければならなかった。しかし、首尾良くライディングに成功し、雑誌で知った新しいテクニックにも挑戦できたと言う。25歳の時であった。

そして、丁度この年の夏に鵠沼海岸で、内藤より数歳年下の佐賀亜光や松田章らが米兵からサーフィンを習い始め、翌1962年に日本初のサーフィンクラブとなるサーフィング・シャークスが誕生する。彼らは会報を発行したり、他のクラブと交流したりしながら、サーフィンをスポーツ文化として発展させ、1965年には日本サーフィン連盟を設立するに至った。

６．サーフボード製造の先駆者、高橋太郎、鈴木正との比較

内藤と同じように実際にサーフボードを見たこともないままにボードづくりに夢中になった青年がいた。一人は「日本で初めてサーフボードを作った男」とし

て知られる高橋太郎(1941年生)である。もう一人は、1964年に神奈川県茅ヶ崎市に日本で最初のサーフショップを開いた鈴木正(通称、ゴッデス、1942年生)である。彼らがサーフボードを作った過程と内藤のそれとを比較してみよう。以下の記述は、高橋の評伝[18]と鈴木の著作[19]、筆者が行ったインタビュー[20][21]による。

高橋は1941年12月11日に旧東京市赤坂区氷川町で生まれた。高校時代の夏休みは神奈川県葉山の海でキャンプをして過ごし、波乗り（素乗り）もしたと言う。1950年代後半に葉山でも波乗りが子どもの遊びとして行われていたことが、わかる。17歳、1959年の夏に小学生向けの雑誌でハワイに関する記事の中に、板の上に立って波乗りしている写真を見て衝撃を受け、サーフボード制作を思い立ったという。そして、実際に制作し始めるのだが、１号機が角材とベニヤ板、２号機はフィンを付け、３号機は横幅を65cmに拡張し、板に反りをつけるなどの改良を加えている。この３号機でテイクオフ（板の上に立って波乗りすること）に成功する。1960年の夏である。この間、国立国会図書館に通い、サーフィンに関する文献を読みあさり、写真などからボード制作へのヒントを得たという。

そして、1961年の夏に葉山の一色海岸でサーフィンをしている外国人に出会いサーフボードの上に塗るワックスを教えてもらい、ウレタンフォームでできているボードを見せてもらう。彼は在日米国軍人の息子であった。当時の日本ではサーフボード用のウレタンは製造されていなかったため、代わりに発泡スチロールを使うことを思いつき、グラスファイバーで表面を固めたボードも作成する。最初は自分たちの遊び道具を自分たちで作ることが目当てだったが、友人や知人の注文を受けるうちに徐々に注文販売の体をなすようになっていき、1963年2月21日に日本初のサーフボード制作会社ダックスを設立した。

鈴木正も少年期に見たハワイの絵はがきに描かれていたサーフィンの写真に惹かれていた。1942年に新潟に生まれた鈴木は土建業を営む父親の転居に伴い、茅ヶ崎に住むことになった。そして、最初のサーフボードはベニヤ板で自作するが成功しなかったという。1962年に鎌倉市七里ヶ浜で米兵に会い、サーフィンを教えてもらうようになる。そして、米兵の帰国に際し、サーフボードを譲り受け、ウレタンフォームと樹脂で自作するようになった。その後、本格的に製造販売に取り組み、1964年に「湘南サーフショップ」（現ゴッデス・インターナショナル(株)）を開店する。

三人とも写真だけの情報で、まず木材で作成し、その後、ウレタンフォームの存在を知ってからは、国内の材料を工夫して制作するなど共通している。それから、米兵やその家族との接触もあり、彼らから貪欲に情報を得ている。

まとめ

近代スポーツの多くは明治時代に貿易商やお雇い外国人教師によって日本に持ち込まれた。したがって、貿易港であった横浜や神戸、そして、外国人教師がいた旧制高校や大学が日本での発祥地となっている例が多い。しかし、サーフィンの場合は、他の外来スポーツと伝播・普及の仕方が異なる。子どもと駐留軍兵士という庶民の交流によって、1960年頃、日本の各地で同時的に発祥している。

このようなことが起きた背景には、日本各地で小さな木板に腹ばいになって波に乗る遊びが以前から行われていたからであった。板の持ち方を変えたり、あるいは、板なしで乗ったりして、様々な方法で遊んでいた彼らの中には板の上に立つことまでは考えが及ばなかったかも知れない。したがって、絵はがきや雑誌などで近代サーフィンの写真を見たときの彼らの衝撃の大きさは容易に想像できる。そして、実際にサーフボード作成に取り組んだ青少年は何人もいたかも知れない。

本研究は、日本での発祥とされる1960年頃よりも遙か前、終戦後まもなくからサーフボード作成に取り組んだ鵠沼海岸の内藤喜嗣の事例について、当時の時代状況などから歴史的検証を加え、サーフィン発祥直前の様子をできるだけ正確かつ詳細に記録することを目的とした。概略は以下の通りである。

少年時代から板子乗りをしていた内藤は1947年(12歳)頃に米国雑誌を見てサーフィンを知り、杉板でサーフボードを作成するが立って乗ること（テイクオフ）はできなかった。そして、1951年(15歳)の夏に米兵と知り合い、ベニヤ板で作った中空ボードを知り、自作を試み、翌年にテイクオフに成功する。大学進学や就職などでサーフィンから離れていたが、米国でＦＲＰコート製のボードが開発されたことを雑誌で知ると、国内の素材で作成し、1961年の夏、25歳の時にテイクオフに成功した。

この内藤の取り組みは、内藤より後の時代になるが、日本のサーフィン界を関連用品の製造販売や競技、競技組織運営などの面でリードした高橋太郎と鈴木正の取り組み方と類似している。すなわち、写真などでサーフィンを知り、木製ボードを試作するがうまくいかず、米兵やその家族との交流やサーフィン雑誌からＦＲＰコート製のボードを知り、国内の素材だけで作成を試み、遂に成功を収めるという過程をたどっている点が類似している。このような取り組みは湘南地区以外にもあったかもしれない。そもそも板子乗りがいつどのように始まったのか日本のどの地域で行われていたのかなど興味が尽きないが、これらは今後の課題としたい。

（こばやし　かつのり）

付記：本研究は文教大学湘南総合研究所の研究助成を受けて行った「湘南地域におけるサーフィンの発祥」(2011年度)の研究成果の一部である。

文献等

1) 岸野雄三ほか編、最新スポーツ大事典、大修館書店、1978年、p. 381
2) 西野光夫、たのしいサーフィン、成美堂出版、1971年、p. 13
3) 加山雄三、サーフィンと私、全日本サーフィン選手権第3回大会プログラム、1968年、最終頁
4) 茅ヶ崎サーフィン業組合ホームページ　http://www.csiu.biz/library/story.html
5) 内藤喜嗣、鵠沼海岸でのサーフィンはこうして始まった、探検隊腰越号、vol. 15、2002年3月1日号、pp. 19-25
6) 藤沢市史編さん委員会編、藤沢市史年表、藤沢市役所、1981年
7) 内藤喜嗣編、鵠沼海岸開発史の概略、自家出版、2001年
8) 鵠沼海岸商店街有志、鵠沼海岸商店街100年の歴史、(有)八百力商店発行、2001年
9) 茨城民俗学会、子どもの歳時と遊び、第一法規、1970年、pp. 43-44
10) 湯野浜温泉観光協会ホームページ　http://www.yunohamaonsen.com/?page_id=34
11) ビーパル話題鍋　この“まな板”こそニッポン古来のサーフボードだ！　新島で復元された伝統的波乗り遊び、ビーパル、1998年7月号、pp. 8-9
12) 山崎直之、新島の四方山話と子供の遊び、ハイビジネス、1995年、pp. 93-97
13) ＤＶＤ『日本サーフィン伝説』、ポニーキャニオン、2010年
14) 永峰すみ、大磯の仲間たち－これが波乗りだー、波乗りクラブ、1998年
15) 内藤千代子、歓喜に輝ける夏、生い立ちの記、牧民社、1914年、pp. 52-55
16) T. E. Blake, Waves and Thrills at Waikiki, The National Geographic Magazine, 1935年5月号、597-604
17) J. H. Ball, Surf-Boarders Capture California, The National Geographic Magazine, 1944年9月号、355-362
18) 柴田哲孝、白いサーフボード、たちばな出版、1998年
19) 鈴木正、サーフィン、講談社、1981年
20) 2011年3月21日に高橋太郎氏の自宅(千葉県いすみ市)で行ったインタビュー。
21) 2011年6月28日に茅ヶ崎市のゴッデス本店で行ったインタビュー。

☆ 本稿は、文教大学国際学部紀要 第23巻 第２号 2013年１月に[研究論文]として掲載されたものを、筆者の承諾を得て英文タイトルや抄録を削除し、誤字を修正して転載したものである。

鎌倉での芥川龍之介

小池 清志（会員）

鵠沼の海に蜃気楼が出るなンて、私には信じられない事でしたが、芥川龍之介の「蜃気楼」という作品があります。それは本当に起きた現象で、大正 15（1926）年 10 月 27 日の「横浜貿易新報」（今の神奈川新聞）に載っています。その年、芥川は神経を病み、都会の喧騒を避けて妻の実家がある鵠沼に越して来ました。大正 15 年（12 月に「昭和」と改元）から翌年の昭和２（1927）年にかけて、芥川が鵠沼に住んだのは約一年足らずでした。

芥川に関して「鵠沼を語る会」の研究は深化しつづけています。会誌『鵠沼』で幾度となく取り上げられ、特に私が感銘を受けたのは、大正 15 年 9 月に齋藤茂吉と土屋文明が芥川を訪ねた時、お土産の鉢植えが「葉蘭」だったのか、「駿河蘭」だったのか、そこまで掘り下げた論争に驚きを禁じ得ませんでした。

鵠沼時代の芥川については、会誌『鵠沼』で十分語り尽くされている観がありますので、私は「鎌倉での芥川龍之介」について、ちょっと触れてみたいと思います。

＊

芥川が鎌倉へやって来たのは大正５（1916）年東大を卒業すると、横須賀の海軍機関学校の英語教師として赴任したのがきっかけです。当時鎌倉は東京人にとっては、空気清浄な保養地として脚光をあびていましたし、文士たちも移り始めた頃です。

芥川は鎌倉へ来るとすぐ、彼より前から鎌倉に住んでいた詩人で「月に吠える」で有名な萩原朔太郎や喘息の転地療養に来ていた詩人の日夏耿之介（ひなつこうのすけ）との交遊が始まりました。

芥川は最初江ノ電の和田塚駅近くのクリーニング店の離れに住みましたが、そこへは、松岡譲やのちに鎌倉ペンクラブ会長になった久米正雄らが訪れています。この両者は夏目漱石の令嬢をめぐり恋敵になりますが、久米は松岡に敗れて『破船』を書き有名になりました。

芥川龍之介旧居跡の建物

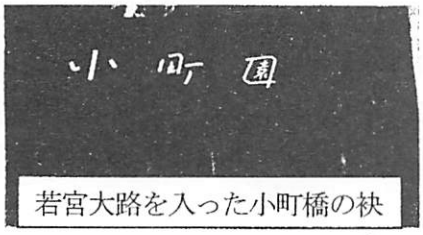
芥川は鎌倉へ来て翌々年の大正７（1918）年ロシア革命の年、塚本文（ふみ）と結婚して大町の横須賀線「三浦道踏切」を渡り元八幡（由比若宮）近くに住居を構えました。旧居跡に立つ建物の壁面には「**芥川龍之介旧家　ここは、芥川龍之介と平塚文子（塚本文のまちがい）が大正７年新婚生活を送った家の跡です**」と記したプレートが嵌め込まれているのはいいのですが、誤りがあるのは戴けません。

大正８（1919）年２月の手紙では「この頃教育業をやめるのだと思うと甚だ愉快です」と教員をやめて東京に帰る決心をしています。その年の７月、芥川は作家に専念するため海軍機関学校を退職し２年４ヶ月暮した鎌倉を引払って東京へ戻りました。

「平野屋」跡に建つホテル・ニュー鎌倉（鎌倉市景観重要建築物）

芥川が立寄ったところとしては「平野屋」と「小町園」があります。大正 12（1923）年、関東大震災があった年ですが、そのひと夏を、芥川は旅館「平野屋」で過ごしました。はからずも同じ時に「平野屋」に逗留していたのが若き日の岡本かの子（画家岡本太郎の母、当時 34 歳）でした。彼女は、髪をぼさぼさにして蒼々とした表情の芥川のどことなく常人離れした行動を見て、芥川をモデルにした『鶴は病みき』を著し文壇に彗星のごとく登場しました。「平野屋」は鎌倉駅西口近くにありましたが、そこには現在「ホテル・ニュー鎌倉」が建っています。

また芥川は大正６年、東京の友人に「小町園」で食事をしようと手紙で誘っています。「小町園」は当時人気のある料理旅館でした。「小町園」は現存しています。先述しました鵠沼時代にも、昭和元（1926）年大晦日から昭和２年の元旦を、鎌倉の「小町園」で年越ししています。芥川は「小町園」の女将に魅かれるものがあったようです。それは芥川が自殺を遂げる僅か７ヶ月前の事でした。



若宮大路を入った小町橋の袂

芥川龍之介の社会に対する懐疑とそれから来る自身の心の不安に耐えられなかった天才特有の繊細さが悲劇をもたらしたものでしょう。　　（こいけ　きよし）

〔寄稿〕

六代目尾上菊五郎の思い出

鵠沼松が岡在住　松本 絹代

その家は江ノ電鵠沼駅を上に登って鵠沼海岸へゆく道でなく、駅から一段下がって片瀬新屋敷へゆく境川の橋の、たもとにあった。

橋に向かって左手の二軒先で、敷地の道に面した中間あたりに大きな門柱があった。左右の門柱には玉石が張り付けられていて、子供にはちょっと登れない高さと太さであった。それに連なる両横の石垣の高さもふつうの家よりずっと高かった。その上に四つ目垣があり季節がくると全体にジンチョウゲの花が匂った。

砂地のじゃりころ道に雨が降り、水たまりになって歩けないから、ちょっと石垣にとびのって四つ目垣につかまって次の家まで行くというわけにはいかない高さであった。

私は、三つ位から十二歳の終戦後まで、よくその家の前の持ち主の若夫婦に可愛がっていただいていた。富士山を描く大家のお弟子さんで毎日日本画を描いていた。猫のえさ入れのように小さな小皿にいろいろの絵の具がそれぞれ溶かれてあり絵筆も花瓶の口を広げたような壺に売るほど入っていた。私は向かい側にかしこまって座り飽きもせずじっと手許を眺めていた。どの部屋に入っても叱られたことはなかったのである。なので、間取りはよく分かっていた。

その家の住人が六代目尾上菊五郎に変わられたのである。六代目が入られてからは俄然にぎやかになった。新婚の画家夫妻とちがって第一、家族が多かった。息子さんや娘さん方それにお弟子さんたちも居た。おつねさん、おみねさん、ばあやさんと三人もお手伝いさんがいた。そしてお隣の家には息子さんの二代目尾上九郎右衛門さんの若夫婦が住んでおられたと記憶している。

家の手入れの大工さん、植木屋の豊さん、お出入りの職人たちは、江の島育ちの父の仲間であった。漁師の友だちも大勢いた。

父は魚屋だったが自分の商売なんかほっといても、人の世話ばかりして、母はいつも嘆いていた。

そこへ有名な歌舞伎役者の六代目尾上菊五郎がお得意さんになったのだから、もう、うれしくってうれしくって“お客さんは六代目一軒だけ”といった有様の父であった。とにかく大所帯なのできっと上得意先でもあったのだ。

その家の前の境川は当時ホタルが長閑に飛んでいたけれど、川底が深くあぶなくて子供には取ることが出来ず、静かな夜、橋の上から眺めていたものだ。

その場所へ六代目は舟着き場をつくり、小舟に乗って江の島へ釣りに出かけていた。わりとせっかちそうに見えた六代目がじいっと釣り糸を垂らして魚がかかるのを待っている様子を想像すると不思議であった。

そんな時に持って行く小さなまるでママゴトに使うような何種類かの包丁、出刃庖丁とか、柳包丁とか、刺身包丁とか五・六本の包丁をピカピカに砥いで手入れするのは父であった。

六代目は釣りも好きだが又、魚がお好きであった。ことにアワビを注文されたのを覚えている。初夏の頃は鉄鉢に氷を入れ青リンゴやサクランボとかビワを浮かべてアワビをサイコロに切った見た目にも美しい涼しげなものや、刺身に薄く切ったもの、ワタは甘辛く煮たりした。

ある日、六代目に「天ぷら屋もしたら」と言われたといって帰って来た父に母は反対した。今、魚屋だけでも忙しいのに、その上、天ぷら屋までしたのでは体が持たない。遊び好きの父が天ぷら屋にはげむわけもない。で結局、その話はたち消えになり私はほっとした。

六代目と父は背丈と太り具合がよく似ていて、着物や帯などをよく頂いて来た。また、掛け軸や日本間の鴨居あたりに掛ける書や絵も頂いて来た。親類が来て欲しがると、母は父にも聞かず、右から左からさっさとあげてしまった。子供心に立派な物をもったいない、しまってとっておけばいいのに、と思ったが、母はそんなものは見るのも嫌だったらしかった。

六代目は舞台のある日はお弟子さんたちやお手伝いさんまで連れて大勢で江ノ電鵠沼駅から出かけられた。父や私も時々連れて行っていただいた。まだ、とみなりさんという、のちに銭形平次をした二代目大川橋蔵（本名：丹羽富成）さんもお弟子さんのひとりであった。

新橋から帰ってくるとき、ばあやさんが私に訊いた。

「わかった？後ろの三人目がとみなりさんだったのよ。」

といわれても日本髪を結って白地に紫色の矢がすりの着物、黒い昆布巻きのように結んだ帯を斜めに背負っている大勢の中のひとりの顔なんてわかるはずもなかった。

日本人形にかざった六代目が箱からすっと出て来て踊る「京人形」とか、わが子をご主人のために毒味させ死なせた母の苦しみの「先代萩」や「土蜘蛛」「義経

千本桜」とかを見せて頂いた。

楽屋を訪れたこともあります。終戦間もなくの楽屋は質素な部屋でした。六代目は小さな鏡台の前で頭にピタッとかぶり物をつけ一人化粧をしておられました。

私は初めはただじっと見つめていましたが、ふと気付くと、ゆかたを腰の下の方までおろしていられるのを見て、化粧は顔だけするものと思っていた私はびっくり恥ずかしくなってしまって、目をそらし、窓から築地行きの電車を見下ろしていました。のれんもなければ美しいランの花の一つもない殺風景な部屋でした。

しかし、塗物の器に入ったお弁当は、おいしかった。また見せて頂く場所は、あるときは舞台の袖の太鼓の音がズシンズシンと響く所で立ってであったり、あるときは椅子の隣の補助椅子であったり、また二階の後ろの方いわゆる天井桟敷であったりした。

夏の暑いさなか川で涼んでいると六代目の家からピーンと張り詰めた三味線の音が聞こえて来る。皆で集まってする稽古はあたりに響いた。

一度だけ六代目の何回目かの誕生祝いであったか、白い晒の布をひらひらさせて踊られるのをお客は座敷から廊下までびっしり、出入りの商人、職人は広い庭に座って拝見したことがある。

六代目は江ノ電鵠沼駅に丸い掛け時計を寄付された。大勢でお世話になるからという意味であったろうか。ごく短い鵠沼生活だったらしいが、着物に茶色のコートを着、金縁の細い眼鏡の六代目を私は今でも時々懐かしく思い出す。

あれから 60 有余年、すっかり変わってしまって、六代目が住まわれた場所は6軒の住宅に細分され、あの舟着き場は護岸工事で堤防は高くなり、もう子どもたちは川べりで遊べない。

（まつもと　きぬよ）

編集注：六代目尾上菊五郎は昭和 21～23 年まで鵠沼藤ヶ谷 2-10 に住んだ。
会誌『鵠沼』25 号に「終戦後の鵠沼・六代目のこと橋蔵のこと」と題して田中まさ子会員も思い出を書いておられる。

〔事業報告〕

第36回鵠沼地区公民館まつり展示部門参加(24年10月20日、21日開催)

芥川龍之介と鵠沼とのかかわり

～芥川生誕120周年記念展示～

昨年は芥川龍之介生誕120年に当たりました。彼が最晩年を過ごした「鵠沼での生活」を「鵠沼を語る会」で長年多くの会員が研究・調査した資料や文章が会誌「鵠沼」に残され、それを基に平成24年10月20日～21日に開催された「公民館まつり」に展示することになりました。

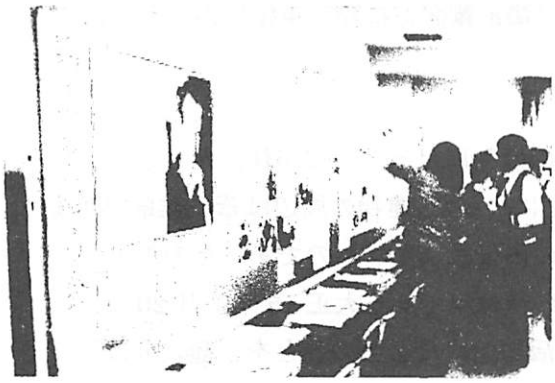
展示企画チーム ― 有田、佐藤和子、柴田、中島の４会員は、８月より会合を重ねて、展示内容の検討をして次のような展示をすることにしました。

「記念展にあたっての冒頭あいさつ」、「鵠沼での芥川の生活と作品」、「鵠沼に芥川が遺したもの－葛巻文庫」、「語る会の会員が発見し、その新聞がもとで作品になった－蜃気楼」等々です。詳細は次ページ以降に記載しています。

文学作品の展示はとかく文字が多くなりがちですが、「公民館まつり」の展示ということで、ビジュアルにと心掛けたつもりです。

各自が分担して展示資料を集め、それをもとに、展示物の制作や写真のコピー等の業者依頼は、竹内会員が担当して見事に仕上げられ、会場での展示物の掲示作業は主に岡田会員が担当されました。

まつり当日は多くの来室者があり、時間をかけて展示を熱心に見る姿も多く見受けられました。会場の机上に閲覧資料として、竹内会員と杉本会員が作成した「鵠沼を舞台とした芥川龍之介作品」と「芥川に関する記事掲載の会誌『鵠沼』抜粋」の冊子を置いたところ、好評で多くの購入希望者がありました。また来場者から「このような展示が僅か二日間で終わるのは惜しい、もっと長くやって欲しい」との要望があったほどの高い評価を受け内容の充実した展示となりました。



なお、展示に適切なアドバイスを頂き、展示会場の当番をされた安藤会員、素晴らしい展示の題字を制作され、当番もして頂いた、佐藤久美子会員や、資料制作に携わったり、会場当番をして今回の展示にご協力下さった皆様に心より感謝する次第です。　　(記：中島 明)

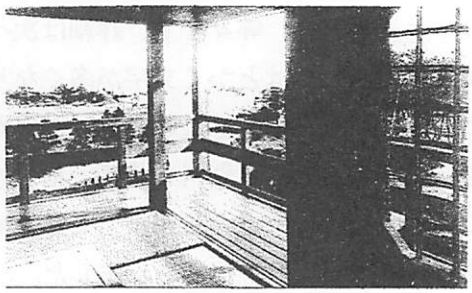
芥川龍之介と鵠沼とのかかわり

鵠沼の文の母の実家での芥川親子

芥川龍之介の妻、文の母の実家が鵠沼にあり、以前から何度か来鵠している。芥川家の窮屈な養父母・伯母から離れ、「西洋皿１枚と缶詰の簡易な生活」、夫婦と子どもで水入らずの一家団らんを望んでいたが、その１年間は佐々木茂索に宛てた書簡に「鵠沼に一ヶ月いる間の客の数は、東京に三ヶ月いる間の客の数に匹敵す」と書き記しているほど多くの人が訪れていた。

鵠沼での執筆活動

芥川龍之介は大正15年の４月、鵠沼の東屋に１ヶ月近く滞在、７月上旬には妻、也寸志の３人で東屋へ。その後、東屋の賑わいを避けて、近くの一軒家・東屋「イの四号」へ転居。さらに執筆活動に専念すべく、東屋とは無関係の二階家に移った。



東屋二階から江ノ島を望む

＊

『僕は鵠沼の東屋の二階にぢつと仰向けに寝転んでゐた。その又僕の枕もとには妻と伯母とが差向ひに庭の向こうの海を見てゐた。僕は目をつぶつたまま、「今に雨が降るぞ」と言った。妻や伯母はとり合はなかった。殊に妻は「このお天気に」と言った。しかし二分とたたないうちに珍らしい大雨になつてしまつた。』

＜『鵠沼雑記』抜粋　東屋にゐるうちに＞

家族水いらずの生活「イの四号」

東屋の貸別荘「イの四号」を有名にしたのは芥川だった。彼が住んだことで、この一角の貸家(貸別荘)群は歴史に残ることになった。建物の周辺は葦や雑草で囲まれ、いかにもひなびた印象。当時の鵠沼の風景はこんなものであったのだろう。

龍之介が「イの四号」に入ったのは、彼の最晩年である大正15年７月20日。この「イの四号」に入って家族水いらずの生活を始めたときのことを、龍之介は「二

度目の結婚」と称し、それなりに新鮮な気持ちでいたように思われる。

だが、後に死に際して友人の久米正雄に託し死後に発表された『或阿呆の一生』の『夜』の項には次のように書かれている。

*

「夜はもう一度迫りだした。荒れ模様の海は薄明かりの中に絶えず水沫を打ち上げてゐた。彼はかう云う空の下に彼の妻と二度目の結婚をした。それは彼等には歓びだった。が、同時に又苦しみだった。三人の子は彼等と一しよに沖の稲妻を眺めてゐた。彼の妻は一人の子を抱き、涙をこらえてゐるらしかった」

宇野浩二は「この鵠沼にいた頃が芥川のみじかい生涯の中でもっとも陰惨な時代であった」と書き、さらに「二度目の結婚」という表現については、「鵠沼の貸し家で、夫婦と子供だけで、暮らすようになったのを、しゃれて『二度目の結婚』と称したのである」と解説している。　(会誌『鵠沼』78号)

執筆活動に専念　二階家に移る

執筆の場として求めた二階家は、東屋「イの四号」とは路地をはさんでほぼ真向かいにあった。東屋とは関係のない建物である。

ここに住んだころの龍之介はアヘンを常用していて、この家から斎藤茂吉に「鴉片丸(あへんがん)乏しく心細く候間、もう二週間分ほど田端四三五 小生宛てお送り下さるまじく候や」との手紙を出している。　(会誌『鵠沼』78号)

*

『僕の二階は松林の上にかすかに海を覗かせていた。僕はこの二階の机に向かい、鳩の声を聞きながら、午前だけ仕事をすることにした。鳥は鳩や鴉の外に雀も縁側へ舞いこんだりした。それもまた僕には愉快だった。「喜雀堂に入る」—僕はペンを持ったまま、その度にこんな言葉を思い出した。』　＜『歯車』抜粋＞

医師の眼でみた鵠沼時代の芥川龍之介

「鵠沼を語る会」元会員で、医師の富士山(ふじ たかし)は大正15年7月27日に、東屋に芥川龍之介を往診している。それから芥川はしばらく、富士医院に通院していた。

富士山は、その頃の芥川龍之介の様子を医師の眼で捉え、会誌『鵠沼』に書いている。

*

「其れは土用の盛り、夕刻に近い頃だった。程近い東屋から芥川氏が悪いから

診察を頼むとの電話で出掛けた。毎年の事ながら、夏場の東屋は避暑客で満員だった。

子供たちは階下で騒いで居た。案内されたのは二階の一番奥六畳の室で、相模灘、江ノ島が手にとる様に見え眺望至極良い。初対面の氏は道すがら想像してきたとは別個の仁であった。文士という面影はどこにも無い痩せた物静かな人であった。梳らない頭髪は蓬々と伸びている。どこか禅僧とでも云いたい感じがした。」

「イの四号」の庭にて

「越えて八月七日氏は突然来院された。頭は例の如く蓬々でヨレヨレの着物に細い帯をグルグル巻きにした無頓着で少しも飾り気のない風貌は今でも一種の懐かしみを以て我家の話題となっている。

其の時氏は年来の神経衰弱の話をした。不眠のため、アダリン、カルモチン等をほとんど毎晩飲むが、一瓦以上のんでも利かぬ事、当時輸入されたばかりのヌマールやアロナール等睡眠剤は何でも試みた様である。で何か良い方法が無いかとの事で、私は毎晩睡眠剤をのむことの害を説き、臭素剤の持続を奨めた。」

「氏は身体が痩せているので結核でもあるので無いかと疑う人もあった様であるが臨床上には決して其の徴はなかった。氏を検死した某医師もその主張していた様に覚えている。」

「夏場の鵠沼は賑やかである。蜃気楼が現れて新聞に書かれたのも氏が蜃気楼を創作したのもこの頃である。

芥川氏は当時青年子女の崇拝の的であった。氏が夫人とともに海岸に立たれると、青年子女がぐるりと遠巻きにしているのを見た。」

「秋になり氏が頭を垂れて瞑想しながら松林を散歩しているのに屡々会った。御気分如何と尋ねると氏は黙って頷いた。相変わらずと云う意味だろうと察した。而して創作に対する瞑想の連絡を断たれるのを好まないのだと考へた。」

「氏を診てから一ヶ年、再び暑い日がやって来た。七月廿四日突然氏の訃を聞いた時あの屡々逢った散歩姿を憶い浮かべた。それは決して創作に対する瞑想ではなく、生死の間に処せんとする苦悶であったのだと考え直さざるを得なかった。」

（会誌『鵠沼』11号　竜之介氏の憶い出　富士山）

鵠沼ゆかりの芥川作品 ― 短編ながらこの地への愛着

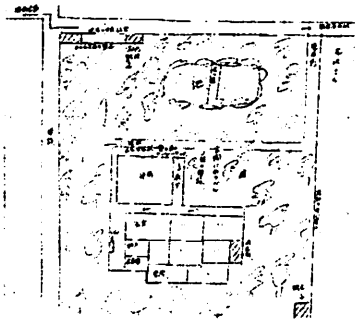
鵠沼に来た芥川龍之介は、親子四人で水入らずの一家団欒を望んだが、相変わらず体調が悪く胃腸障害、不眠、神経衰弱、果ては痔を病み、ついには幻覚の症状も出、阿片の助けをかりるなど窮状に喘いでいた。しかし天才といわれる鋭い感性と創作意欲は、この究極にもめげず鵠沼時代には、その作品十指におよび、鵠沼を舞台にしたものは4作品。短編ながらこの地への愛着を表明している。自殺を動かぬことと考えたのは鵠沼時代で、それは作品に色濃く投影されている。鵠沼は龍之介の「末期の眼」が捉えた重要な光景の一つとなった。

(会誌『鵠沼』69号)

鵠沼時代の作品 ―「点鬼簿」「悠々荘」「玄鶴山房」「彼」「彼第2」「鵠沼雑記」「春の夜」「梅・馬・鶯」「O君の新秋」「三つのなぜ」

鵠沼を舞台にした作品 ―「悠々荘」「蜃気楼」「歯車」「鵠沼雑記」

●「悠々荘」　小説。昭和2年1月1日発行の「サンデー毎日」に発表。モデルとなった「楽々荘」「三楽荘」の名前は実在。大正15年9月末、龍之介は見舞いに来た齋藤茂吉、土屋文明と訪ねている。モデルとなったところの場所、庭園や建物の様子など「鵠沼を語る会」が調べたものを今回、展示。



悠々荘の見取り図

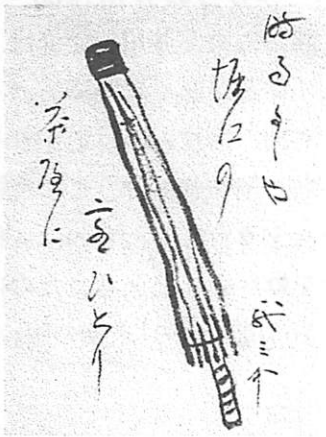
●「蜃気楼」　小説。昭和2年3月の「婦人公論」に発表。大正15年10月に鵠沼海岸に蜃気楼が出たことが新聞で報道され評判になった。それを聞いた芥川が友人を誘って海岸に蜃気楼を見に行ったことが書かれている。その頃陥っていた異常な精神状態が文中に表現されて、名作との評価が高い。この作品中には、鵠沼ゆかりの言葉や地名が多い―東屋、引地川、鵠沼海岸、江の島、松林、松風、砂浜、砂止め・・・

●「歯車」　小説。昭和2年10月発行の「文芸春秋」に発表。6篇からなり、冒頭に乗合自動車に一緒になったという「小林理髪店」の主人のことが書かれている。この理髪店は、鵠沼海岸商店街・有田商店の斜め前にあった。

●「鵠沼雑記」　遺稿。昭和6年7月「文芸的なあまりに文芸的な」に収録。鵠沼滞在中の幻覚や予兆を「僕は」の第一人称で綴ったもので、大正15年に書かれた。

龍之介の遺稿などをまとめた「葛巻文庫」— 葛巻左登子と「葛巻文庫」

葛巻義敏、左登子の兄妹は、芥川龍之介の実姉ヒサの長男、長女。葛巻左登子は88歳で他界したが、「鵠沼を語る会」の会員だった約 10 年間は、龍之介の身近な姪として叔父に関するさまざまな貴重な話をされていた。



傘の図

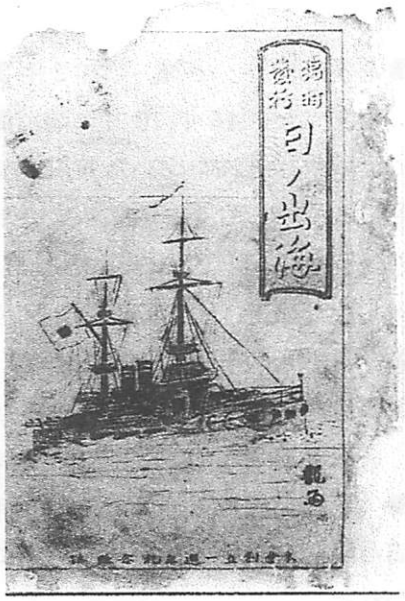
左登子は龍之介を叔父というより兄のように慕い、可愛がられて育ったという。「さとこ」も龍之介の命名で、「里子」、のちに「左登子」となる。義敏も龍之介の田端の家に住み込み、原稿の整理など書生の仕事を手伝い大事にされた。これは「傘の図」で、龍之介が葛巻さと子に描いて与えたもの。傘の真ん中に紅で「さと子」とある。

龍之介の没後、遺稿など約 3,000 点を義敏が保管・管理していたが、後、鵠沼から芥川文(妻)、比呂志（長男)、也寸志(三男）が夫々東京に移った。残された敷地内に義敏、左登子の兄妹が住み、それらの品々を大切に保存していた。義敏没後、左登子がそれらを受け継いで守っていたが、平成８年、健康上の不安もあって入院することになり所蔵してきた資料等は「鵠沼を語る会」が全面的に協力して藤沢市へ寄贈。現在は、「葛巻文庫」として文書館で一括管理している。

葛巻文庫の主な所蔵品

＜日の出界＞　江東小学校（現両国小学校）の１、２年生時代に、龍之介が中心になって発行した回覧雑誌。5冊ほど作られたが、そのうちの 2 冊が鵠沼にあった。龍之介が編集長となり友人からの原稿を自分で清書しカット等も描いた。

＜手帳＞　龍之介の手帳は、その創作活動の一端を知るうえで貴重な資料である。手帳は1から 11 まであるが、「葛巻文庫」には3、4、6、7、8、11に該当する6冊がある。いずれも火災に遭ったため、焼損や水・薬品によるダメージを受けて、判読が難しい。



龍之介が中心となった回覧雑誌

＜ノート断片＞　龍之介が学生時代に書いたと思われるノートの断片、約450 枚がある。冊子の形をしたものは無くバラバラな状態で、いろいろな種類のノートの断片である。字は非常に細かく判読が難しいが、創作メモや戯画にみられる怪奇趣味など、青年期の龍之介の姿を偲ぶことができる。

芥川龍之介『蜃気楼』のきっかけ

鵠沼を語る会の元会長・高木和男が大正 15 年、横浜高等工業(現横浜国大工学部)の学生だった時、鵠沼海岸で蜃気楼を発見した。このことはいくつかの新聞で報道され、話題を呼んだ。

人気を呼んだ鵠沼海岸の蜃気楼の絵葉書

芥川はこの新聞記事を見て隣の貸別荘（イの二号）に住むO君らを誘い蜃気楼を見に出かけた。

＊

「或秋の午頃、僕は東京から遊びに来た大学生のK君といっしょに蜃気楼を見に出かけて行った。鵠沼の海岸に蜃気楼の見えることは誰でももう知っているであろう。現に僕の家の女中などは逆まに舟の映ったのを見、「この間の新聞に出ていた写真とそっくりですよ。」などと感心していた。

＜『蜃気楼』＞

新聞報道

葛巻文庫や蜃気楼発見に関する当時の新聞を、当会会員の所蔵品から 7 点展示。「竜之介の手帳 初の一般公開」(東京新聞　平成 14 年 9 月) 鵠沼を語る会が仲を取り文書館に寄贈された葛巻文庫の手帳のことなど、当時の当会メンバーの写真入りで掲載。「湘南 鵠沼海岸にしん気楼 現はる」(東京朝日新聞　大正 15 年 10 月 27 日/28 日)、横浜貿易新聞(大正 15 年 10 月 27 日)など、発見当時の様子が克明に報道されている。

（公民館まつり 2012　展示企画チーム）

事業報告

今井達夫著「馬込文学村二十年」
冊子制作

岡田 哲明（会員）

「鵠沼を語る会」は年間事業計画のひとつとして、ここ数年「今井達夫遺稿の活字化」プロジェクトを継続し、会誌『鵠沼』に作品を連載しています。

このプロジェクトに今年度は、特筆に値することがありました。それは原稿用紙365枚におよぶ「馬込文学村二十年」の活字化、冊子化を完成させたことです。

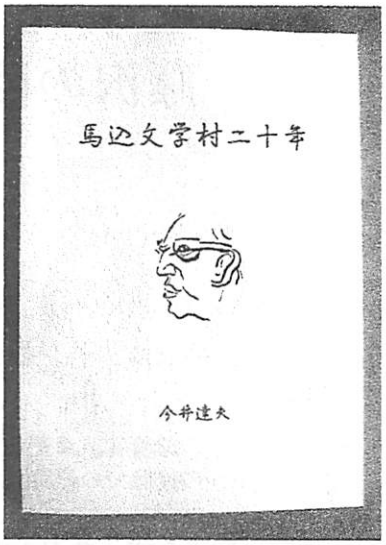
今井達夫は馬込の文士たちのお互いの交友について書こうと思い立ち、少なくとも三度、原稿を書いています。それは鵠沼を語る会が今井未亡人から預かった自筆原稿二種類と、もう一つは活字になって初校、再校が済んで三校にかかる段階で、出版取りやめになったゲラ刷りです。自筆二種類のうち、ひとつは冒頭部分の一節が失われていました。ゲラ刷りは三田文学に保存されていましたが、これも一部紛失していて、完全ではありませんでした。残る一つは「馬込文学村二十年」という表題付きで原稿用紙にノンブルが打ってあり、完結していたので当プロジェクトの一環として活字化、冊子化することにしました。

この原稿の活字化には、大田区立郷土博物館友の会会員でもある土岐臣道会員が中心となり、馬込文士村ガイドの会の島田貴子さん竹馬千恵子さんの協力を得てパソコン入力しました。

最初に「馬込文学村二十年」の原稿を土岐さんに預けたのは、平成22年7月だったと思います。彼は上記のお二人に諮って入力作業に取り掛かり1年余かけてＣＤに記録しました。当会では翌23年の6月に「史跡めぐり」で馬込文士村を訪れ、島田、竹馬のお二人に案内をして頂きました。それにより会の馬込に対する関心は一気に高まり、10月18日に馬込にある大田区立郷土博物館を有田会長他が訪れ、この原稿ほか、今井の馬込関連資料を寄贈しました。さらに10月開催の公民館祭りでは、「鵠沼と馬込文士村」をテーマに展示をしました。

平成24年度に制作費を予算計上して、冊子化が具体的になりました。土岐さん、竹内さん、岡田の三人で横書き入力された原稿をＢ５版縦書き２段組みに割り付けし、それに解説と年譜を付けることにしたのです。年譜は渡部瞭さんの労作を基に詳細事項を岡田が加筆したもので、横書きから縦書きへの変換には竹内

さんが、奮闘しました。馬込の住居の地番確認等は、大田区立郷土博物館・岩崎みどり学芸員の協力も得ました。３回の校正には原さん、佐藤弘さんにも手伝って頂き、最終原稿を校了したのが平成24年秋。印刷製本して「本の体裁」になったものを手にしたのは11月に入ってからでした。



表紙画 上田臥牛

「毎日少しずつを目標にして作業に取り掛かりました。趣味と実益を兼ねて植木の剪定を週2～3日やっておりますので木に登った日は、なぜか一杯が二杯と進んでしまいキーボードから遠ざかりました。“時間があれば今井の原稿”と自分に言い聞かせ、およそ今井達夫らしくない小さな可愛い字体に向かいました。旧字体や固有名詞などには、悩まされましたが、ひらがなの多い文章は読みやすく、数ヶ月すると彼の字体や文体にも大分慣れ、作業は楽になっていきました。今、振り返ってみますと、それは充実した幸せな日日でした」と出来上がった冊子を手にした土岐会員は、感慨深げに作業に費やした日々を回想されました。

年内には関連団体への贈呈、会員ならびに会員外の方への頒布も完了、ご協力下さった方々に誌上を借りて御礼申し上げます。

『馬込文学村二十年』

体裁：B5版 本文163ページ 表紙 レザック175kg 無線綴じ 中表紙 カラー

制作部数：120冊　　制作費：14万2,500円

会員頒布(半額￥600)：37冊　　会員外頒布(￥1,200)：49冊

贈呈：23冊(団体20冊　個人3冊)

贈呈先（団体）

藤沢市総合市民図書館 / 藤沢市湘南大庭市民図書館 / 藤沢市辻堂市民図書館 / 藤沢市南市民図書館 / 藤沢市鵠沼市民図書室 / 藤沢市鵠沼郷土資料展示室 / 藤沢市文書館 / 県立神奈川近代文学館 / 三田文学 / 大田区立郷土博物館 / 大田図書館 / 馬込図書館 /池上図書館 / 洗足池図書館 / 大田文化の森

（今井達夫プロジェクト担当：　おかだ てつあき）

〔事業報告〕

藤沢の巨樹めぐり下見会

佐藤 弘（会員）

藤沢の巨樹（※）めぐりは、平成 23 年度の事業計画としてとりあげられ、年度の終盤に具体的なスタートをした。

※ 巨樹とは、環境省が調査上での巨樹・巨木を定義しており、地上から約1.3メートルの位置での幹周が3メートル以上を「巨樹・巨木」と定めている。

鵠沼地区に留まらず、藤沢市内の巨樹をめぐることによって鵠沼の巨樹を新たに認識しようと目論んだ。幸い 2002 年３月藤沢市教育委員会発刊の小冊子があったため、それに基づき 10 年後の現状はどうなっているのかを協力者を募り先ず下見調査することにした。樹木の枝葉の茂り具合による調査に適した時期、天候、季節なども考慮し計画を立案し展開した。

平成 24 年３月を皮切りに現在まで４回実施した。できるだけ地域をくくり、普段行く機会が少なく、藤沢市最南部の鵠沼から離れている最北部の御所見地区から南下して来ることにした。毎回、朝 10 時から夕方近くまで半日、車２台に分乗し日常、目にするものと異なった景観とか雰囲気も楽しみながら調査した。

これまでに調査した地域は主に東海道線より北側地域であり、それらを総括してみた。４回の調査で、藤沢市の巨樹 93 本中 74 本調査することができた。調査したうち６本は現在何らかの事情で無くなっていた(詳細は一覧表参照)。

場所的には、伐採等がなく巨木になる環境が継続している所、神社やお寺の境内、旧家が多い。数値的にみると、調査した 74 本中 65%の 48 本が境内にある。そのなかでも特に多く存在しているのは、鵠沼神明の皇大神宮の 11 本（15%）、遊行寺の７本（９%）、本町の常光寺も６本（８%）が現存している。個人宅は 11 本（15%）であり、旧家と思われるお宅の広大な敷地内にあることが多いが、樹形は上方が止められていたり、強剪定でコンパクトな形になっているものも多く見られた。

樹種として多かったのは、タブノキ 19 本（26%）とイチョウ 18 本（24%）であり、それらで約半分を占めている。続いてクスノキ 12 本（16%）、スダジイ 11 本（15%）、ケヤキ７本（9%）であった。それらで計 67 本となり約 90%と

なっている。日本各地に多いスギ、ヒノキおよび鵠沼で見ることの多いクロマツはいずれも巨樹としての大きさのものは存在していない。

珍しいものとしては六会小学校のアメリカキササゲがあった。アメリカキササゲは北アメリカ原産の落葉高木で、明治時代に日本に渡来した木である。初夏に花の見頃をむかえ、冬の間はササゲ豆のような果実を枝からぶら下げている特徴ある樹であるため、それぞれの時期に訪ねてみるのも面白いと思う。

御所見地区寒川社のハリギリも北海道には大きい木が多いがこの辺りでは比較的珍しい。別名センノキ、テングウチワとも呼ばれる。葉柄は長さ 10〜30cm、葉身は掌状に 5〜9 裂し、カエデのような姿で径 10〜25cm と大きく、天狗の団扇のような形をしている。そこから「テングウチワ」と呼ばれることもある。北海道には大きな木が多く、明治末には下駄材として本州に出荷された。現地で探す時は分り難いため、特徴的な形の落ち葉を見つけ周辺の樹を見上げるのが良いと思う。

大きさ的に最大のものは群を抜いて藤沢地区遊行寺の大イチョウであるが、大きさだけに留まらず姿、形も美しく圧巻である。第二位は藤沢地区常光寺のイチョウ、第三位は大庭地区臺谷戸稲荷の森のタブノキ、次に御所見地区葛原田中家屋敷林のスダジイ、常光寺のカヤと続く。田中家のスダジイは近接して２本あり、樹種別では１位と２位であり、圧倒される大きさである。

個人宅とか境内の進入禁止の林に入ることは通常難しいが、事前のお願いや当日の突然のお願いにも拘らず気持ちよく御協力いただけたことに感謝を表したい。旧家の家人とか近所の方々にお話を伺ったりして有意義な時間も持てるのも楽しみのひとつである。

ここまでの巨樹めぐり下見会について、参加された一部の方に自由に思ったこと感じたことを寄稿していただき掲載した。少しでも巨樹めぐりの雰囲気を感じていただければ幸いである。

今後の計画としては、藤沢地区と鵠沼地区の残りおよび片瀬地区、江ノ島地区で19本を調査して下見会は完了する予定。更に、下見の結果を選抜して、できるだけ多くの会員が手軽に参加できる見学イベントを設けたいと思っている。

（さとう　ひろし）

［参考文献］　藤沢市教育委員会：「藤沢の文化財」― 樹木を訪ねて―　2002 年 3 月発行

調査結果一覧

注） 幹廻りは正確な測定が困難なため、藤沢市教育委員会発行の「藤沢の文化財」の数値を掲載

順番	地域/場所	樹種	幹廻りメートル	住所	補足説明
平成24.3.6		参加者（敬称略）鈴木、有田、森岡，佐藤和子、綿谷、高橋、竹内、佐藤弘			
大庭					
1	宗賢院	クスノキA	3.53	大庭1-8-1	山門左脇、高さも高い
		クスノキB	3.07		境内中央、一段高い墓地の東の方、こちらも立派である
2	蚤谷戸	タブノキA	5.51	大庭1809	主幹が折損のため、高くはない。樹種別１位
		タブノキB	3.09		こちらも主幹が折損しており、高くはない
六会					
3	佐波神社	スダジイ	3.68	石川139	社殿に向かい右脇、それほど高さはない。東側造成地開発中
御所見					
4	宇都母知神社	スダジイ	3.06	打戻2661	広がった枝の下側に椿が植わっている。樹齢300年？
5	森家	タブノキ	3.33	打戻2516	敷地内テニスコートの西南に接したフェンス脇。整枝、剪定されている
6	寿昌寺	イチョウ	3.89	用田2224	山門手前に左右あるうちの向かって左側
7	寒川社	ハリギリ	3.30	用田739	林の奥のため見つけ難い。葉の形も特徴的、見分ける目安となる。樹種別１位
8	大貫家	クスノキ	3.17	葛原366	表門から家越しに見える。二階の屋根より高く聳えている
9	皇子大神	サワラ	3.16	葛原1382	滝不動の北側。大鳥居西脇にある。樹種別１位
10	滝不動	イチョウ	3.21	葛原1917	『滝のお山』と呼ばれた面影が感じられる所
11	豊受大神	クスノキ	3.17	菖蒲沢625	県道22号宮の腰交差点南西角の神社境内
12	田中家	スダジイA	5.50	葛原1143	太い方、かなり朽ちかけてはいるが、圧巻である。樹種別１位
		スダジイB	4.94		細い方、屋敷の裏側にある。2本隣り合っている。家人の話によれば、50年前は現在の３倍程の高さがあったとのこと。樹種別２位
藤沢					
13	常光寺	イチョウ	5.86	本町4-5-21	裏山の西側中腹にある。樹種別２位
		カヤ	5.37		左手墓地中央。樹種別１位
		タブノキA	3.97		上記カヤの近く
		タブノキB	3.94		半分朽ちているが、新しい枝も伸びている
		クスノキA	3.12		山門を入ってすぐの左右の樹
		クスノキB	3.04		
平成24.4.17		参加者（敬称略）鈴木、有田、森岡，佐藤久美子、綿谷、高橋、竹内、佐藤弘			
六会					
1	亀井神社	イチョウ	3.22	亀井野554	六会小学校の東隣。近づくと意外と太い
2	六会小学校	イチョウ	3.36	亀井野550	県道43号不動前交差点東100m小学校グランド西南隅。かなり枝打ちされている。樹木が多く環境が良い

順番	地域/場所	樹種	幹廻りメートル	住所	補足説明
	六会小学校（続き）	アメリカキササゲ	3.15		小学校グランド北側やや西寄り、滑り台近く。ヒマラヤ杉は台風で倒れて椅子２脚に変身している
長後					
3	白山大神	イチョウ	3.64	下土棚1065	社殿前面脇。かなり枝を切られている。銀杏は大きく大量に採れるとのこと
4	井上家	スダジイ	3.19	下土棚462	長後駅南東に隣接する屋敷の旧県道側。訪問時不在
5	泉龍寺	イチョウ	3.90	長後968	国道467号長後小入口交差点北北西400m、長後小の北250m、旧街道沿い。本堂前中央で姿も美しい
6	福島家	シラカシ	3.00	長後1502	県道42号長後橋北東200m、天満宮南200m、民家の裏庭。裏側から見た方が大きさが分る、他にも大樹がある。樹種別１位
7	諏訪神社	スダジイＡ	3.58	高倉2674	県道42号高鎌橋交差点北300mの神社。境内の東南
		スダジイＢ	3.28	高倉2674	県道42号高鎌橋交差点北300mの神社。社殿左、御輿倉の裏
六会					
8	法泉寺	イチョウ	3.49	亀井野391	国道467号法泉寺歩道橋西30m。準四国の札所でもあるお寺
9	雲昌寺	イチョウ	3.45	亀井野1457	国道467号六会交差点東100m。本堂左奥　準四国の札所でもあるお寺
		クスノキ	3.24		国道467号六会交差点東100m。本堂右奥
		ケヤキ	3.00		国道467号六会交差点東100m。本堂北側
平成24.5.22		参加者（敬称略）有田，　高橋，　竹内，　戸井田，　森岡，佐藤弘			
藤沢					
1	体育センター	クスノキ	3.56	善行7-1-1	善行最大の巨木。幹が4本に分枝されている。大きなクスノキが数多く近くにあり、同定できなかった
六会					
2	加藤家	タブノキ	3.11	亀井野205	国道467号法泉寺歩道橋東150m。かなり整枝されている。個人宅の裏、奥のほうにあり、道路からは見えない
3	宵木家	スダジイ	3.46	亀井野267	国道467号六会交差点東50m、広い農家の庭。門から奥に入って玄関近くにある。高さは高くないが、横張りの大きい巨木
4	御嶽神社	イチョウ	なし	西俣野1891	県道403号ランド入口交差点南600m、鳥居脇にあったようであるが、現在はない。消防分団の建物改築のため伐採
5	神明社	イチョウ	3.01	西俣野2053	国道467号に併行する八王子街道新田バス停から東に入り坂を下り下の道の交差点から30m手前一段高い所。かなり整枝されている
藤沢					
6	立石神社	イチョウ	3.25	藤沢3182（立石3丁目）	国道467号立石2丁目の交差点の東方500m、社殿の傍らに立つ。バランスがとれた姿で近くで見上げる程
7	白旗神社	ケヤキ	3.22	藤沢2-4-7	参道の石段を上り、次の石段の手前左手奥の急斜面の際
8	真浄院	イチョウ	3.47	西富1-5-32	遊行寺参道左手の寺、門を入って右側に立つ。かなり整枝されている

順番	地域/場所	樹種	幹廻りメートル	住所	補足説明
9	遊行寺（続き）	大イチョウA	6.83	西富1-8-1	境内広場の中央に位置し、とにかく大きい。高さ市いずれも立派。市内１位
		イチョウB	3.27		境内広場の東寄りに位置する。似た大きさのイチョウが近くにある
		ムクノキ	なし		裏手の山腹にあったようであるが、現在はない
		クスノキA	3.74		東側墓地の中程にある。樹種別市内１位
		クスノキB	3.53		墓地の国道に近い側にある
		スダジイA	3.60		北側にある裏山の中。特定して写真を撮ることはできないため、群生での写真となる
		スダジイB	3.12		林の中に入ることが出来ず断念
平成24.11.20	参加者（敬称略）鈴木、有田、森岡，西村、竹内、高橋、佐藤和子、戸井田、柴田、佐藤弘				
大庭					
1	三觜家	ケヤキ	なし	羽鳥3-15-5	現在は門前広場の道路側に伐採されたものが展示されている。樹種別１位であった
2	鈴木家	ケヤキ	なし	羽鳥3-21-1	現在は痕跡もない
鵠沼					
3	皇大神宮	タブノキA	5.17	鵠沼神明2-11-5	社務所に向かって左、高さより横への張りが大きい。樹種別２位
4		タブノキB	4.72		鳥居向かって左の銀杏の裏。樹種別４位
5		タブノキC	4.08		渡り廊下の奥（裏）。樹種別５位
6		タブノキD	3.35		境内東北の道路端近く
7		タブノキE	3.32		この神社で８番目に太い樹
8		タブノキF	3.16		境内北西の端近く
9		タブノキG	3.10		
10		タブノキH	3.06		タブノキBの西10メートル
11		ケヤキ	3.86		境内東北の道路角近く。羽鳥三觜家のケヤキが無いため今は市内１位
12		ムクノキ	3.39		落葉高木、葉の形を目安に探すと良い
13		イチョウ	3.36		鳥居の向かって右奥
14	湘南高校	クスノキA	3.60	鵠沼神明	正門入ってすぐ右手
15		クスノキB	3.06		正門入ってすぐ左手、右手のクスノキより細い
藤沢					
16	永勝寺	イチョウ	3.56	本町4-4-15	山門に入って左手、姿が良い
17		イチョウ	3.12		山門に入って右手（左手より細い）、姿が良い
18	おしゃぐじ稲荷	タブノキ	3.39	本町4-8-2	南仲通４丁目会館（本六会館）旧県立藤沢高校正門左。かなり切り詰められている。社宮司（しゃもじ）の杭あり、社にはしゃもじが奉納されている。近くの人から話を聞いた
19	大鋸稲荷	ケヤキ	3.42	大鋸2-5	藤沢団地の一角、３号棟西側急斜面の崖上、墓地の隣。墓の関係者と話をした

順番	地域/場所	樹種	幹廻りメートル	住所	補足説明
村岡					
20	小池家	ケヤキ	なし	柄沢220	新しく造成された土地に変わってしまい、現存しない
21	柄沢神社	タブノキ	なし	柄沢488先	新しく造成された土地に変わってしまい、現存しない
22	二伝寺	タブノキA	3.68	渡内543	東側山腹を覆う大木。少し朽ちている
23		タブノキB	3.31		西側山足にある
24	宮前	タブノキ	4.91	宮前560	鳥居をくぐって右手。樹種別３位
25	御霊神社	スダジイ	3.01		裏山の登って右手に水平道を行き左手。白の標識から南の位置

未調査（今後調査予定）

順番	地域/場所	樹種	幹廻りメートル	住所	補足説明
藤沢					
	白山神社	ムクノキ	3.51	藤沢676先	
		イチョウ	3.43		
	藤沢小学校隣墓地	ムクノキ	3.42	本町1-2	
	平野家	イチョウ	3.22	本町1-12	
片瀬・江ノ島					
	本蓮寺	イチョウ	4.58	片瀬3-4-41	
	竜口寺	タブノキ	3.70	片瀬3-13-37	
		イチョウ	3.14		
	江島神社	スダジイ	3.49	辺津宮	
		イチョウ	3.22		
		タブノキA	3.97	中津宮	
		タブノキB	3.44		
		イチョウ	3.10		
		タブノキ	3.23	東斜面	
		イチョウ	3.31	奥津宮	
鵠沼					
	関根家	クスノキ	3.28	本鵠沼2-5	
	中原稲荷	タブノキ	3.50	本鵠沼2-16-6	
	斉藤家	ケヤキ	3.83	本鵠沼5-10-35	
	関根家	タブノキ	3.00	本鵠沼5-13-15	
	宮沢家	タブノキ	3.01	鵠沼石上3-1-23	

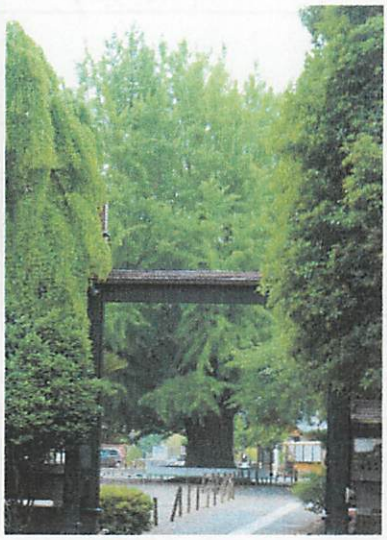
藤沢の巨樹

おしゃくじ稲荷　タブノキ

宗賢院　クスノキ

井上家　スダジイ

田中家　スダジイ



遊行寺　イチョウ

臺谷戸稲荷の森 タブノキ

大鋸稲荷　ケヤキ

寒川社　ハリギリ

宮前御霊神社　スダジイ

皇大神宮　スダジイ

（撮影：竹内 広弥）

三本のタブノキ

高橋 博明（会員）

普段は気にも留めなかった樹木、鵠沼のことを調べているとき、原町の中原稲荷にある三本（現在は二本）のタブノキ、これは石楯尾神社が現在の皇大神宮に移転してからは原町の守り神として中原稲荷の建立と共に、浅場家、榛葉家、森家（後に森井家）の三家が、鵠沼の発展と神への感謝を込めて植えたと思われる。残念ながら一本は枯れてしまい、後にエノキを植えたがこれも枯れてしまった。数年前までは残る二本は元気よくそびえていたが、台風や潮風などにより大分傷んでしまっている。何とか元気を取り戻してほしい。

青木家のスダジイ

—巨樹めぐりで感じたこと—

六会地区青木家のスダジイが見つからない。巨樹ということで上ばかり見て捜していたらありません。雨の中３０分程してやっと道路から少し入った庭先にありました。背丈は約６メートル位だが堂々とした姿であった。

泉龍寺のイチョウ

御所見地区の田中家のスダジイ、推定六百年の大木ですごい迫力、圧巻である。

長後地区の泉龍寺のイチョウはなかなかの美形である。本堂の前に一本ではあるが見事なものである。

台風や強風、伐採、枯死などいろいろあると思うが、この鵠沼や藤沢の栄枯盛衰を見てきた巨樹達に昔の出来事を聞いてみたい。

最後に、市内にはまだまだ幹周り３メートル以上の巨樹はたくさんあると思います。市の再度の調査をお願いしたい。

（たかはし　ひろあき）

巨樹めぐり

西村 望（会員）

巨樹めぐり、以前から参加したい一つのテーマであった。ところが、火曜日はもう一つの予定が重なっており参加の機会がなかったが、今回参加して大変よかった。

皇大神宮の森で幹周りを計測

巨樹、地表より約130cmの高さで樹周りが300cm以上といっても見た目と実測では、だいぶ異なる。見た目に大木と言っても実測すると300cm無かったり、さほど大木のようでなくても実測すると、300cm以上あることもあった。

皇大神宮の森に入ったのは、勿論初めてであり、巨木が多くあり巨樹も多くあり鵠沼の歴史を感じた。永勝寺（飯盛女の墓のある寺）にも巨樹があり、道路わきの社宮司神社にも巨樹が頑張って生きていた。午後からは二伝寺、藤稲荷などを経て御霊神社へ。御霊神社の裏山も、開発の手が入って居らず、昔のままのようで多くの巨木、巨樹があった。反面開発されて跡形も無い所もあり、　せめてなんらかの形で記録だけでもあればと強く感じた。特に、三觜家では場所全体が保存指定されているところであり、記録、説明があってもよいのではないかと感じた。せっかく先哲が調査して記録を残してくれ、市でも掴んでいる（管理対象？）のであれば、木の名前と番号を記した小さなタグでも付けておけば、保存、管理もしやすいのでないか。最後に、この企画をしていただき案内いただいた諸氏に謝意を表します

永勝寺の2本の巨樹—イチョウ

（にしむら　のぞむ）

巨樹めぐりに参加して

綿谷 克延（会員）

昨年会員佐藤弘さんを中心に市内御所見、長後、六会、大庭他市内巨樹めぐりに参加させて頂きました。併し２回参加のみで自己の都合で腰を痛め長い歩行に支障を来す為その後は中座しています。樹木に関しては殆ど無知の小生を除いて皆さん巨木に大変知識が豊かに反し方向音痴の小生、市内とはいえ旧在所は全く無知で分乗、指摘された社寺、学校、旧家、屋敷林に共有する巨木の名を改めて伺い認識すると共に存在を新たにしました。

昔大木は防風、防火の役割保持の為植樹され由緒ある樹として伐採を免れ現存とか、無知の小生今でもイチョウ、クスノキを除いてスダジイ、タブノキ他、巨木の名は伺っていますが指摘されねば未だ明確でありません。

六会小のアメリカキササゲ

前回同行の折り、特に印象深いのは六会小学校のアメリカキササゲの由縁である。樹齢百有余年、何故百年も前に当地に運ばれ、当時藤沢の僻地へ植樹されたのか聞きそびれた。

残念ながら台風で倒木となった同校のヒマラヤスギ、現在倒木の幹を利して校舎内に安楽椅子、腰掛け等に設けてあるが記念樹痕跡として永遠に残るでしょう。

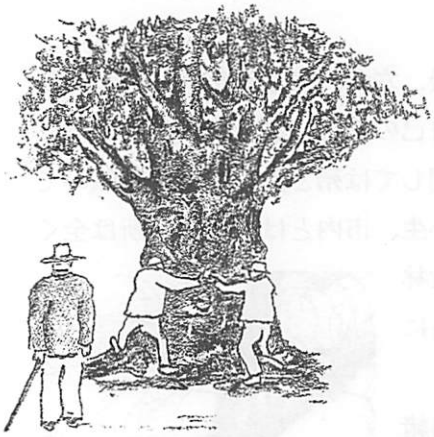
ヒマラヤスギの倒木で作った椅子

市内一位を誇る遊行寺のイチョウは幹周り６メートル余、我が家に鎌倉八幡宮で倒木前に収めたイチョウの樹の写真を引き伸し額に入れ飾ってあるが、何れも指定天然記念物である。遊行寺には他にクスノキ、スダジイの大木Ａ、Ｂがあるが、烏森皇大神宮にもタブノキ、ケヤキ、ムクノキＡ、Ｂと幹周り３メートル以上が数多く存在しているのが知り得た。我が家の大木、桜の樹直径30センチメートル近くは諸般の事情で我が手で処分した。

（わたや　よしのぶ）

巨樹と私

森岡 澄（会員）



大庭、宗賢院のクスノキ（目通り３．６メートル）からスタートした巨樹めぐりは都合４回、まもなく一周年を迎える。平素は使うことのない「目通り」という言葉が目の高さに位置する幹の太さを示すことを鈴木先輩から、あらためて教わった。

日々の生活の中で付き合ってきた樹に対するとらえ方がこの一年で大いに変化した自分に気付きます。本来草木は好きで狭い庭の松、梅、楓など、自分流に鋏を入れて三十余年、もぎたての夏蜜柑はペクチン豊富で、無添加のママレードができる、ゆすら梅は愛らしいピンクのジャムに仕上る、採れすぎた柿は二～三年がかりで柿酢に生まれ変わる「果実によって人はその木を知る！」聖書の中の言葉だったと思う。家の廻りの樹に対しての見方は功利的で昨今頻繁に言われるスローライフの一端をもたらせてくれていた。

この一年の巨樹めぐりで自分の内に変化が生まれてきたものの一つに樹を擬人化している自分があるということと、若木でなく老木、巨木であることが僕をそうさせているのでしょうが、巨樹を前にして素直な自分になっています。そして僕は多くの質問を投げかけています。あなたはどうしてここにいるの？　いつからこうしているの？　どれだけの野鳥があなたの腕にとまりにくるの？　春にはどうなの？　夏にはどうなの？　雨は？　風は？　いったいどれだけの虫があなたを栖（すみか）にしているの？　この音は？　土の中ではどんなことが起きているの？　あなたにはどんな物語があるの？　未知なる興味がとめどなく湧き上がってくる、ほんの一刻、立ちどまっていまこうして味わっている、触ったり、見たり、聴いたりしている五感全てを巨樹にゆだねさえすれば、巨樹は実に多くのことを語ってくれた。巨樹の多くは鎮守の杜にあった、藤沢にこんなにも鎮守の杜があったことも再認識した。私たちの暮らしの中で鎮守の杜はなくてはならないものであり、巨樹がそこにそうして在ることがいかにかけがえのないものであるかを、今となって、この期に及んで感慨に浸る僕です。　（もりおか　きよし）

今井達夫遺稿

散歩のできる街

今井　達夫

たまに横浜に出ると、のんびりする。町筋を散歩することができるからである。

東京へもめったに出ないが、出るたびにびっくりする。散歩どころではない。

都内にも散歩のできる場所があるが、それは特定の地域である。そこまで出かけないと、歩くためにはまるで戦時体制だ。

ラッシュ・アワァでないかぎり、横浜の町筋は散歩気分で歩いても、お咎めを蒙るような脅迫感におそわれない。この点を、僕は大勢のひとたちにこれ宣伝につとめている。この美点よ、消え失せないでくれ。

ただし、いい道がすくないのが弱点である。本町から山下公園、山手に登ってもいいが、昔の競馬場へんまで行くとがっくり来る。僕は競馬ファンではないから、全国の競馬場どころか、ほんの二つ三つきり知らないが、府中はまあまあとして、中山あたりは風景が面白くない。その点、根岸はおそらく世界有数の環境をそなえていると思う。

当局よ、なぜ返してくれと談判できないのか。今のままにしておくのは、怠慢のかぎりである。

伊勢佐木町通りに車を通さないのは、見上げたものである。いつまでもつづけてもらいたいものである。

ところで、元町に文句をつける。あのせまい通りの両側に車が止めてあると、その間を車が走るから、われわれはどぶ板を踏まないと通れない。ショウインドウを覗きこむ余裕を失ってしまう。なんとかなりませんか。

僕のアイデアを披露しよう。

簡単なことだ。道の上に屋根をつくって、歩道にするのである。自然、商店は二階にも店の入り口とショウ・ウインドウを設けるだろう。そこでショッピングの客たちは、悠揚せまらざる態度で通ることができる仕掛けだ。車の客は今までの通り下の道を利用すればいい。商店は簡単に上下二軒の店を持つことができる。どこかの音頭ではないが、上も行く行く下も行くである。が、こんな唄はこしらえない方が、元町の品格のためにいいように思われる。

さて、次は野毛だが、さすがに僕も手のつけようがない。電車が通るのをやめてから、ゆっくり考えることにする。

野毛山公園へのぼる。のぼればこの辺はなかなかいい道だ。ただし、図に乗ってそのまま歩きつづけ、老松町をすぎると大変なことになる。

明治の末年、小学校の三年秋に鵠沼に移るまで、僕の家は日の出町駅の真上、あの段々をのぼりつめた右側にあった。横浜の下町を全部眺望のうちにおさめていたばかりでなく、七月四日独立祭の花火を座敷に寝たまま見ることができたので、当夜は大勢の客を招いてご覧に供した。

その辺の道がひどいのである。以来五十年たっているが、まるでなんとか文化財みたいに旧態を丁寧に保存している。三年ほどまえ歩いてみて、なんどか涙に暮れたものだ。市長は公舎から足を伸ばしてみるのも一興ではないかと薦める。

ところで、市の中心地帯へ下りよう。

東京では、日光から南千住までドライヴするのと、都内を第二京浜の五反田まで抜けるのと比べた場合、都内を突っきる方がはるかに時間を喰うという。

横浜では今のところそんな珍奇な現象は幸いないらしいが、磯子に埋め立てができたり、横須賀方面にも工場地帯がふえたりすると、往復するトラックその他大型が疾走することになろう。手を打つなら、今のうちである。

新しいハイウエイをこしらえて貰おう。保土ヶ谷あたりから弘明寺を抜けて貰おう。市内途中に用事のない車は全部そっちへまわって貰おう。直通と途中用事とが互いに邪魔しあわなければ、運転手諸君のいらだちも随分かるくなるだろう。

もし、どうしても市内の中心地帯を通過したいなら、ここでまた道路は屋上を走って貰う。通過地帯のビルジングはすべて屋根の高さをそろえることにして、屋上を通過専用道路にすればよろしい。

何しろ、僕の願いは、横浜を散歩のできる街にしておきたいのである。散歩ができなくなれば、東京へ出たって同じことである。

「お散歩はハマへ。」

市役所に代わってキャッチ・フレーズをこしらえた。生まれ故郷の横浜のためだから、無料で進呈いたすことにする。

さて、そこで今度は乗り物についていわなければならないのだが、残念ながら紙数が尽きた。またのことにいたしたい。

《編集注：1960年代前半、横浜の地方紙かタウン誌に書いたものと思われる》

「鵠沼を語る会」活動の記録

（平成２４年１０月～平成２５年３月）　総務担当

平成２４年１０月例会　　１０月９日（火）１０時～１２時　　２２名出席

司会進行　柴田会員

議題１　会誌１０５号について— 内容確認、印刷製本作業の協力者を募った。

議題２　公民館まつりについて— 開催日の展示当番の他、公民館から依頼の協力要員を募り決めた。

議題３　藤沢の巨樹めぐり下見会の案内 — 10 月 23 日の計画内容説明と併せて参加者を募った。

議題４　『馬込文学村二十年』冊子制作について— 進捗状況が報告された。

お話 —『芥川龍之介と鵠沼のかかわり』　公民館まつりの展示にさきだち、展示企画リーダーの中島会員から映像で展示内容のプレビュー、さらに展示以外の事柄についても話があった。

公民館まつり　　１０月２０日、２１日

『芥川龍之介と鵠沼のかかわり』のテーマで展示した。本文参照。

運営委員会　　１０月３０日（火）　　７名出席

平成２４年１１月例会　　１１月１３日（火）１０時～１２時　　２２名出席

司会進行　西野賢二会員

議題１　会誌１０５号について — 出席者に配布し、欠席者には別途配布とした。冊子『馬込文学村二十年』は希望者に頒布した。

議題２　公民館まつりの報告 — 全体の状況報告がされた。展示当番をされた運営委員以外の会員から感想を述べてもらった。

議題３　藤沢の巨樹めぐり下見会の案内 — 10 月 23 日の予定が雨天で中止となったため、新たな日時説明と併せて参加者を募った。

お話 —『鵠沼の雨乞い行事』　岡田会員より会誌掲載以外の内容も含めての話があった。内容は会誌 105 号参照。

藤沢市内巨樹めぐり下見会１１月２０日（火）本文参照　　１０名参加

運営委員会　　１１月２７日（火）　　１０名出席

平成２４年１２月例会　　１２月１１日（火）10時～１２時15分　２０名出席

司会進行　綿谷会員

議題１　新年会について —　催しなど内容の説明がされた。

議題２　会誌１０６号ついて ― 会員からの投稿が要望された。

議題３　藤沢の巨樹めぐり下見会の報告 ― 11 月 20 日の下見会の報告説明がされた。内容は本文を参照。

お話 ― **鵠沼郷土資料展示室で展示中の『写真集に見る鵠沼の 80 年･･･旧鵠沼書店主 福地誠一･･･』『鵠沼の景観 20 年のうつりかわり』**を内藤会員の解説付きで見学した。

運営委員会　　１２月１８日（火）　　１１名出席

平成２５年１月例会　　１月１５日（火）１１時３０分～１４時　３１名出席

司会進行　中島会員（新年会も）

議題１　会誌１０６号ついて ― 現時点の予定原稿項目が紹介された。

引続き

新年会　有田会長の開会あいさつ、佐藤和子会員による乾杯の音頭と続き、歓談の後、各人から今年の抱負、所感等を御披露いただいた。恒例のビンゴゲームを行ない、和やかな時間を過ごした。佐藤弘会員の一本締めでお開きとなった。

運営委員会　　１月２９日（火）　　１０名出席

平成２５年２月例会　　２月１２日（火）１０時～１２時　　２３名出席

司会進行　岡田会員

議題１　新年会の報告 ― 会計報告の他、数人の方に今後のため感想を聞いた。

議題２　会誌１０６号について ― 原稿集結状況の報告があった。

議題３　藤沢の巨樹めぐりについて ― 今後の計画の方向が説明された。

議題４　その他 ― **会員に**新年度の事業計画の提案を要望。

お話 ― 高橋会員が**「鵠沼のある1点から周りを見渡すと鵠沼、辻堂元町、藤沢、鎌倉の神社、寺院がみえてくる」**をテーマに話された。

運営委員会　　２月２６日（火）　　１１名出席

平成２５年３月例会　　３月１２日（火）１０時～１２時　　２５名出席

司会進行　竹内会員

議題１　会誌『鵠沼』１０６号内容および印刷製本について― 掲載原稿の紹介がされ、印刷と製本作業の協力要請があった。

議題２　来年度の事業計画について― 項目案（叩き台）の紹介があり、出席者からも新たに提案をしてもらい論議した。次回の例会時までにメモにての提案が要望された。

議題３　その他 ― 鈴木三男吉会員が３月 31 日で満 100 歳になる。市長が訪問

し、花束と色紙を贈り長寿をお祝いする行事があることが報告された。

お話 ― 平成 23 年６月史跡巡りとして『馬込文士村』を訪問した時に立ち寄った大田区立郷土博物館の岩崎みどり学芸員から、同じ様に多くの作家、芸術家の住んだ**鵠沼と馬込の関連性、郷土博物館の現状ならびに啓蒙活動**について話していただいた。

引き続き、鵠沼郷土資料展示室で**10 周年記念の『鵠沼の歴史』**の展示を、解説を交えながら見学した。

運営委員会　　**３月２６日（火）**　　**１３名出席**

平成２４年度事業計画実績概要

今年度の締めとして、事業計画と進捗状況を以下にまとめた。

Ａ　全員で取組むもの

１）公民館まつり展示

『芥川龍之介と鵠沼のかかわり』の資料展示をした(本文参照)。

２）史跡めぐり

７月例会時の後半、公民館をスタートし、地元鵠沼松が岡と鵠沼海岸地域の芥川龍之介ゆかりの場所を散策した(会誌 105 号参照)。

３）藤沢の巨樹めぐり

下見会を計４回実施(本文参照)。次年度も残り分を引続き実施予定。

４）鵠沼の旧い地名

４月例会の中でフリートーキングを実施した。今後も実施予定。

Ｂ　グループで取組むもの

１）今井達夫『馬込文学村二十年』冊子化

昨年１１月に完成（本文参照)。

２）鵠沼と芥川龍之介

上記Ａ 1)に結びつける活動となった。

Ｃ　その他

１）相応しいテーマが発生した都度追加して行く

新しいテーマは特になかった。

会員総数：６１名（３月末日現在）　９月以降、会員の変動はありません。

（文責　佐藤　弘）

編集後記

＊今冬は東北・北海道で雪害が甚大で、温暖な湘南に住む有難さを痛感しました。その湘南もスギ花粉飛散が例年以上との予測。加えて偏西風に乗って黄砂のほかにPM2.5とかいう有害物質も飛来するらしい。ご用心！

＊今号発行日2013年3月31日、鈴木三男吉会員が満百歳の誕生日を迎えられます。市長の表敬訪問があるそうです。お喜び申し上げます。

＊長谷川会員が伯父長谷川路可画伯と従兄弟同士に当たる父君との親密な間柄を追想して書いて下さいました。文末に転載した大佛次郎の「路可伝」は画伯の人柄を余すところなく活写しています。

＊チョウのことなら竹内会員。昨秋、郷土資料展示室に御自身採集した標本を並べ解説されたのを頂きました。チョウの世界にも栄枯盛衰があるとは思っても見ませんでした。

＊山上会員のくげぬま断章（VI）は門付け万歳、凧など大正昭和の正月の風物詩から相撲の話へ、岸田劉生の相撲好き、江見水蔭の文が発端で国技館のネーミングになったなど、興味深い話題です。

＊有田会員の汐止の碑の謎は広田弘毅自筆の題字を自宅の土蔵から発見。汐止という地名は今、誰も知りません。その謎に迫ります。汐止とは何か、どこをいうのか、なぜ碑を建てようとしたか、なぜ建てられなかったか、などを皆で検証しようとの提案でもあります。

＊鵠沼海岸でのサーフィン発祥前史は小林会員が大学で発表された研究論文の転載を許可して下さいました。発祥地のひとつである鵠沼の住民としては常識として知っておきたい内容です。

＊コーヒーブレイクは小池会員が鎌倉での芥川について書いてくれました。公民館祭りが鵠沼での芥川でしたから好対照です。

＊六代目尾上菊五郎の思い出を寄稿して下さったのは江ノ電鵠沼駅前の魚屋「魚直」の娘だった松本絹代さん。少女時代に近所へ疎開して来た六代目と実父とのお付き合いを懐かしむ内容の話です。

＊事業報告は公民館祭り展示「芥川龍之介と鵠沼とのかかわり」の報告、今井達夫「馬込文学村二十年」冊子制作の報告、「藤沢の巨樹めぐり」はその下見会の報告と、参加された会員に感想を書いて頂きました。

＊今号は原稿が沢山でしたので今井達夫遺稿はわずか２ページの短文を載せることにしました。（岡田）

『鵠沼』　第106号
平成25年３月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行　鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=http://kugenuma.sakura.ne.jp/